

天明期江戸両替屋役金一件

鶴岡実枝子

天明年間に三都の両替商に対して新たに役銀が賦課され、これを機会に江戸の両替株が六四三株に改められたことは、既に周知の事実である。⁽¹⁾そして、この両替屋役銀は、いわゆる田沼時代に広範な業種にわたって行なわれた冥加金・運上金の徴集と、仲間組織の再編成という幕府の財政経済政策の一部をなすものと認められている。⁽²⁾小稿は、申渡しから実現に至るまでの経過を、江戸両替屋仲間と幕府の記録によつて辿りつつ、これまで必ずしも明らかにされていない江戸の両替商の在り方を窺う資料とすることを意図している。

一

事は天明元年（一七八二）八月二十一日、江戸中の惣両替屋、すなわち本両替屋および銭両替屋の行事が残らず南町奉行所へ呼出され、次のような申渡しを受けたことに始まつた。⁽³⁾

文字金吹替以後四十年余無之、追年瑕金・輕目金多ク相成候由、世上差支ニも及候而は難捨置事ニ付、以来両替屋共金座ニ指出次第無代ニ而直シ相渡、両替屋共金座ニ役銀為差出、尤新規ニ役銀差出候ニ付、是迄両替屋之歩合金壹兩ニ付銀は貳分違、銭は貳拾文違致シ候処、以来銀は壹分、銭は拾文迄を限り増歩差免シ、右両替屋共銘々役銀高之儀、月々両替高多少も可有之ニ付、金座ニ対談致シ、双方不相当之儀無之様、役銀高割合取極可申

立旨、後藤庄三郎は申渡有之候間、庄三郎方より重立候両替屋共は申達次第、無遅滞罷越、銘々両替高有体ニ致対談、少分之両替屋共は組合より申通し割合等之儀、金座は申談候様可致候

申渡の主旨は、元文元年（一七三六）の改鑄以後、金貨である小判・壹分判の改鑄が行なわれず、そのため瑕金や輕目金が多くなり、世上の通用に支障を来しているので、今後そのような瑕金・輕目金を兩替屋が金座へ持参すれば無料で直す代りに、兩替屋から金座へ役銀を差出すことを命じ、この役銀負担の補償として、従来慣行として行なわれてきた金一兩につき銀は二分、錢は二〇文を限度とする手数料に、それぞれ一分・一〇文の増歩をうわ乗せすることを認めるというのである。そして、この役銀高の業者間での割合法に関しては、町奉行所は直接指示することを避け、後藤庄三郎方と兩替屋中の実力者たちが対談の上で決定するよう申渡しているのである。

後藤庄三郎は幕府の「御金改役」であるが、その職掌は、金地金・古金及び金貨幣すなわち成貨の鑑定・極印を掌るものとされている。⁽⁴⁾この後藤の管轄下にある金座の鑄造した小判に、鑄造技術または材質の故か、流通の過程で発生した切れ目などの損傷や、磨滅による輕目金などがかなり混在し、通用に円滑を欠くことが多かったことは、享保以降幕府の切金・輕目金の強制通用令が頻発されたことによつて知られる通りである。こゝで、切金・輕目金についての幕法の沿革を概観しておこう。

『両替年代記』によれば、切金に関する記事の初見は万治元年（一六五八）六月、後藤庄三郎よりの沙汰としての次の記事である。

同所（後藤役所―引用者注）より兩替町・駿河町・常磐橋・新兩替町之兩替屋、世間並に切小判嫌申候、火事以後御城様、色付小判御用多、切金不直候故、是迄之儀ハ尤ニ候へ共、今日より直シ遣シ申候間、已来ハ前之通取引仕、大分之歩引不仕候様と被申渡

明暦の大火後、後藤役所では公儀の御用（小判の色付）繁多で、切小判の修理に手が廻わり兼ねたこと、そのため両替屋が切金の取引に高額の歩引を行なっていたことが窺われるが、これは大火後の一時的現象ともみられる。次いで延宝二年（一六七四）四月、江戸の本両替商から「切金之儀御訴訟」として「近年世上小判取遣吟味六ツヶ鋪儀ハ、当時後藤にて作直候小判ハ目方急度四匁七分六厘有之、然ル処前々よりの小判は四匁七分六厘無之故、諸向共取遣ヲ厭と候ニ付、夫ヲ後藤ニ直シニ差出候ても、江戸中多人数之儀、急速ニ不出来候故、諸人手詰ニ成、両替屋も迷惑仕候旨」の訴願が出され、これを受けた幕府は、後藤方で新規に始めた直し小判に極印を打つことの停止を申渡している。この場合の切金は軽目が問題となっているが、『両替年代記』の著者は「此後天和・貞享・元禄の初、御吹替前迄ハ不絶瑕小判を直シニ出せし也」と注記している。これによつてみれば、元禄の改鑄以前においては、瑕金・軽目金は両替屋の判断で金座へ持参し、同所において修理する事が日常的に行なわれていたと思われるが、一面金座の側の修補に応じる態勢は必らずしも充分ではなかったように見受けられる。その後元禄の改鑄を経た宝永二年（一七〇五）十月になると、幕府は両替屋が切金の引替に歩銀をとることを禁じ、「但小判折候て遣方滞可申分は後藤方ニ差越、分銀を出し無瑕金と引替可申」と令しており、折れ曲つて使用に耐えないものを除き、切金の無歩引での通用を強制するに至つた。

しかし、このような強引な一片の幕令で事態が收拾されたとは思われない。そして享保六年（一七二二）本両替から提出された直し金に日数がかかり過ぎて難渋との訴願を受けて、町奉行所は両替屋へ対して世上に通用が許容される切レ金の範圍を諮問した上、同年六月四日に次の町触を発令した。⁽⁵⁾

慶長古金之内、切金又ハ金目輕ク成候も有之、通用差支候由ニ候間、向後は小判之内三分迄之切替ヶ所、金目三厘迄輕キ分、并考分判も少々之疵目輕候共、無滞通用可仕候、右之分ハ上納金にも後藤方ニ而包申管ニ候、勿論

新金も右可准候、此外ハ只今迄之通りを以、金座ニ差遣し直させ可申候、若通用之切金目輕金ハ歩銀取候者於有之ハ急度曲事可申付候
右之通町中ニ可触知者也

丑六月

第1表 切金・輕目金の通用範圍

発令年次	切 金	輕目金
享保 6	3分迄無構	3厘以内
" 8	切の大小無構	同上
" 16	同上	同上
" 20	同上	4厘以内
延享 2	同上	同上
寛延 2	同上	同上
" 3	5分迄無構	同上
安永 7	同上	同上

この町触は、切金・輕目金の限度を法定した最初のものである。しかし、三分〇・九センチ迄の切れ一カ所まで許容とするこの規定は、二年後の享保八年に早くも撤回されて、「切の大小無構通用」と修正され、寛延三年（一七四九）に切れ五分迄と再修正されている。一方の輕目は享保二十年以降一厘を増し、四厘までとすること、天明元年の両替屋役銀の申渡しの時に至るまで継承されたのである（第1表参照）。

このような経過からみると、切金、輕目金の問題は早くから存在し、それらを選別する市中の風潮に対して、幕府は無差別通用の方針を採り続けたといふことができる。そして『両替年代記』の享保十一年の条には、九月十八日大岡越前守から「瑕金無滞通用可致旨」の御触の周知徹底を申渡された記事のあとに

右ニ付其旨三組にも申通スト云、翌年仲間定書ニ曰、切金取引、可折離程之切ハ三度振て離候ハ、持主ハ可引替ト云

愚云、如此嚴重之御触といへ共、矢張請取兼し哉、此後切金を引替具候様、無余儀筋ハ被申儀節々有之、尚未々を合見るべし

とあるように、そのような幕府の方針が守られず、歩引取引が行なわれていたのである。

これに対して、切れ・軽目の選別を厳密に行なおうとしたのが後藤役所の立場であつた。現に、『兩替年代記』は瑕金通用令の勵行が触出された翌年の享保十二年の条に、上納金の包立てに後藤が沓厘の軽目小判を選び出した事実を記録している。また安永七年（一七七八）五月二十二日に触出された寛延三年令の再触の後文には

右之趣、延享二丑、寛延三年年相触、上納金之儀も、五分迄之切金、四厘迄の軽目は包方致候儀ニ有之候処、近年後藤庄三郎方ニ而上納包之節、少々之瑕も彼是申候ニ付、自ら兩替屋共其外ニ而も少々之瑕金をも不請取、又は分合銀相對致請取候ニ付、武家井在町共取遣滯候趣相聞候、仍之上納金包方之儀、弥前々之通相心得、世上通用可成分は無差支包方可致旨、庄三郎ニ申渡候、然上ハ世上通用無滯筋ニ候条、兩替屋共其旨を存、前々相触候通相守、五分迄之切金四厘迄之軽目金共無滯可通用、若可成分通用差滯、又は分合取候趣於有之は吟味之上急度可申付候⁽⁶⁾

と述べられていて、後藤が公儀上納金の包立てに瑕金の選り出しを行なっている事実を、幕府自身が指摘しているのである。明らかな法令違反にも拘わらず処罰の対象とせず、単に「世上通用可成分は無差支包方可致旨」を申渡すに止めているところに、御金改役後藤庄三郎と金座の特殊な在り方が表われていると思われる。

切金・軽目金の補修に対して金座が取得した料金については幕令の中に所見がないが、享保六年二月に本兩替仲間が町奉行所に提出した瑕金に関する答申書に、「慶長切金は迄は沓兩ニ付直賃五分宛、外ニ軽目は其不足に応じ足金代添、金座にて直し申候」、『兩替年代記』と述べられている。八%強の修理費と補充原料費とが金座の所得となっていたのであり、瑕金選別の勵行による「直し」の増加は直接金座の利害にかゝわるものであつた。

二

小稿の冒頭に掲げた通り、天明元年八月二十一日の江戸における両替屋役銀の申渡しは、享保前後から幕府が執拗に強制しようとした切金・輕目金の通用令を停止し、金座において直し賃無料で修理する代りに、直し金の仲介を担当する立場にある江戸の惣両替屋に役銀を課して、後藤方へ納入することを命じたものであった。その背景なり動機は、実は案外に単純なもののように見受けられる。すなわち、江戸の惣両替屋への町奉行からの申渡があった二十数日前の七月二十九日に、当時の老中首座松平右京大夫（輝高、天明元年九月二十六日没）は、町奉行へ対して次のような指令を発しているのである。⁽⁷⁾

町奉行ニ

後藤庄三郎儀、文字金吹替以後四拾年余御金吹方歩一被下御用無之、大勢之役人扶助は勿論、支配金座人共相統方及難波候由、然処追年瑕金輕目金多相成候由、世上差支ニも及候而ハ難捨置夏ニ付、以来両替屋共々金座ニ差出次第無代ニ而直シ相渡、両替屋共々金座ニ役銀為差出、右役銀之儀は壹ヶ月両替高金千兩ニ付金壹兩程之積り、尤新規ニ役銀差出候ニ付是迄兩替之歩金凡金壹兩ニ付銀は貳分違、錢は貳拾文違程ニ候処、以来銀は壹分、錢は拾文迄を限増歩差免、右両替屋共々銘々役銀高之儀は日々兩替高多少も可有之ニ付、金座ニ対談いたし、双方不相当之儀無之様役銀高割合取極可申上旨、庄三郎ニ申渡候様御勘定奉行ニ申渡候間、庄三郎ニ重立候両替屋共ニ申達次第、無遅滞罷越、銘々両替高有躰致対談、小分之両替屋共ニは組合ニ申通、割合等之儀金座ニ申談候様、両替屋共ニ可被申渡候、尤右申渡方等之儀、委細御勘定奉行可被談候

両替屋役銀の少くとも直接の目的が、改鑄による歩一収入の途を閉ざされてきた幕府の金貨鑄造機関である金座の

維持・救済にあったことが、これによって明らかであり、町奉行の両替屋への申渡しは、その真意を示さない形で行なわれたものであることが知られる。

因みに、金座後藤庄三郎家の来歴・事績等に関しては、意外に詳かでない。「金座後藤庄三郎由緒書」等によると、初代光次は文禄二年家康に召出され、同四年武藏墨判の鑄造を建策して金銀改役を仰付られ、馬飼料として江州野洲郡小比江村において五十一石六斗の朱印地を拝領、江戸のちに駿府にも居宅を賜わったというが、それらの年次などは明瞭でない。以来徳川氏の幣制の樹立に貢献した廉により御金銀改役（宝永二年以降は御金改役）を世襲し、勘定奉行所管下にあつて金座を主宰したわけであるが、御金改役の金座における地位権限は、時代によって消長があつた模様である。特に金鑄貨が後藤傘下の下請集団で行なわれた所謂「手前吹時代」と云われた元禄以前と、「金座直吹き時代」となつた元禄改鑄以後の金座組織の確立と共に、御金改役の権限は種々の制限を受けるようになったと云われている。⁽⁹⁾権益の縮少を意味すると思われるその制限の内容は明らかでないが、金座後藤家の事歴を伝える諸書には「御金改役」としての恒常的な職俸についての記述は見出せない。従つて先にみた町奉行に対する老中指令中の「四十余年御金吹方歩一被下御用無之」とする鑄造高に應じた歩一が金座後藤の収入の基幹をなしたと思われる。「徳川時代の金座」によれば、吹方歩一は貨幣鑄造について幕府から御金改役・金座人及び吹処棟梁へ付与するところの鑄造料又は手数料とも云うべきものであつて、慶長金鑄造に當つて、出来金千両につき金拾両、即ち百分の一を御金改役後藤庄三郎に賜わる旨を家康自ら命じたのに起因する。兩来改鑄の都度定規に拠つて下附されたが、鑄造高の多寡・鑄造の難易・物価の關係等により歩合に増減があつたとされる。分一の支途中には鑄造上必要な諸経費を含むものであり、分一の分配を受ける御金改役後藤は更にこれを江戸・京・佐渡在勤の自分配下の役人に分配、金座は年寄役以下の小役人に至るまで、所定の割合で分配、吹所も同様であつて、現今の役員賞与金の如きものであつたと説明されている（なお年次は降るが、後藤役所・金座の構成の一端を示す資料として、塚本豊次郎「日本貨幣史」所収の「金局秘記」によつて、付表1・2・3を掲げた）。

付表 2

		人数	1カ年 手当
江戸	金座人	10人	10兩
	吹屋棟梁	2	10
京都	金座人	10	10
	吹屋棟梁	2	10
佐渡	吹屋棟梁	2	10
三カ所総人数		26	

但し、江戸・京都金座人20人の内見習5人(手当金4兩)、吹屋棟梁3カ所6人の内見習2名(手当金3兩)、外=江戸吹屋細工人定員3人(同3兩)

改鑄の中絶によつて主たる収入源を喪つた金座への配慮は、明和二年(一七六五)以後、従来の請負方式から定座方式に改められた錢座を後藤の支配に置き、更に明和九年九月以降、金銀座以外に新規の鑄錢出願を禁止する旨の全国法令が出されているところに表われており、明和二年以降の主として鉄錢の鑄造は後藤庄三郎の管する定座によつて行なわれたものと思われる。しかし、この鑄錢支配が後藤にどれほどの取得をもたらしたかについては詳かでない。

因みに、当時の後藤庄三郎は九代光暢であるが、同家系図によれば、同人

後藤配下役人・金座人数并1カ年給与(文政)

付表 1

		人数	1カ年 手当	外=扶 持方料
江戸	年寄役	3人	30兩	1兩3歩
	改役	4	20	1兩3歩
	並役	9	15	1兩3歩
	並役見習	2	6	1兩3歩
	役所詰	3	10	1兩3歩
	計	21		
京都	年寄役	2	25	1兩3歩
	改役	2	17	1兩3歩
	並役	5	12	1兩3歩
	役所詰 見習共計	3	6	1兩3歩
	計	12		
佐渡	年寄役	1	20	1兩3歩
	改役	2	15	1兩3歩
	並役	4	10兩2歩	1兩3歩
	役所詰	1	4兩2歩	1兩3歩
	計	8		
三カ所総人数		41		

付表 3

	人数	1カ年 給与
江戸役所金見役本 役	2	3兩
見 習	3	2兩
江戸役所玄關番女 関 番	2	4兩
以下定人数 中 番	3	3兩
小 遣	2	2兩2歩
表裏門番	4	2兩2歩
飯焚仲間	1	2兩2歩
計	11	

が金座座人青山氏から後藤家の養子となり、家督を相続、御金改役に任じられたのが、鑄銭が後藤支配の定座方式となつた明和二年のことである。そして光暢は安永四年閏十二月に「功を以て」天和以来禁じられてきた「帶刀を許され」た⁽¹³⁾一鑄銭事業を指すか⁽¹²⁾とあるから、金座後藤の復興のために、幕府へ積極的に働きかけていたことも推測される⁽¹³⁾。

一方、こゝで行論の都合上、当時の江戸の両替商の構成について通説の域を出ないが概観しておこう。従来江戸の両替商に関しては、金銀のみを取扱う本兩替と、それ以外の脇兩替に区別し、脇兩替のうち、金銀と共に銭をも取扱う三組兩替、銭だけを取扱う銭屋⁽¹⁴⁾番組兩替、および上野領・済松寺領の寺社方に属する門前地の銭兩替仲間が存在したと説明されている。もつとも江戸大火後の明暦三年以降の仲間記録を伝える本兩替仲間の成立の時期も詳かでないし、また「本兩替」なる呼称が何時頃から用いられていたのかも明証はない。たゞ初期の兩替商は金座・銀座の近辺に集住し、灰吹銀など地方的な貨幣として流通していたものと幕府の貨幣との交換に従事し、鑄造原料の回収と統一貨幣の普及に一役かっていたらしいとされる⁽¹⁴⁾。特に金・銀座近くの本兩替町・駿河町に集住した兩替商は早くから兩町兩替屋と称し（のち常磐橋・本町分をも含む）金・銀座の「出入」となり、公儀御用を勤めていて別格視され、それ以外の兩替屋の存在が増加するにつれ、脇々の兩替屋⁽¹⁵⁾脇兩替に対する「本兩替」の呼称が何時しか生じたものと思われる。もつとも明暦期に三三人で構成されていた本兩替仲間は、寛文四年（一六六四）に四〇人に増加したものの、天和元年（一六八一）には二七人に減少、元禄六年（一六九三）には更に六店が休業するに至り、周知の江戸兩替屋六〇〇人の限定が行なわれた享保三年（一七二八）には一六人と減少の一途を辿り、しかもこの間明暦三年以降営業を継続し得たものは僅かに三店を数えるのみで、享保期の一六店のうちの殆んどが天和・元禄以後の新規開業店で占められており、⁽¹⁷⁾前期の金匠的系譜をもつと思われる本兩替の営業内容が、天和・元禄期を境に質的变化を来していたこ

第2表
江戸本両替仲間人数

明暦	3	33人
寛文	4	40
延宝	1	31
天和	1	27
元禄	1	(休業) 6
正徳	4	22
享保	3	16
元文	1	11
明和	4	9
安永	1	6
寛政	12	3
文化	1	2
文化	3	1
文化	5	6
文政	10	5
天保	1	4
慶応	2	5

「両替年代記關鍵」
卷二考証篇より第3表
三組両替屋人数

正徳	5	68
享保	4	58
"	9	61
宝暦	5	60
天明	3	55
文化	3	129
享保	7	128
安政	4	127

とを窺わせる(第2表参照)。一方、脇両替のうち、神田組・三田組・せり組から成る三組の成立の時期も詳かでないが、早い時期から本両替の店前で銭相場の立会を行ない、本両替を通して銭相場の書上げを行なうなど、本両替とは可成り密接な関係をもつ存在であつたことが窺われ、享保四年五八人を数えており、その後の人数の変遷は第3表にみられる通りであるが、この三組のうち、正徳四年に開業し、せり組に所属した播磨屋新右門店の場合、下り酒問屋を兼営し、上方との為替取引・諸侯の御屋敷御用を手広く引請け、幕府代官掛屋を勤めるなどの営業内容から推して、三組両替仲間には本両替と近似した営業をもつものを含むものであつたと思われる。また元禄頃から急増したといわれるその他の銭両替は、享保三年の天秤六〇〇挺限定の際、五二〇人を超えていた勘定となるが、享保九年二七組の番組に編成されている⁽¹⁹⁾。その営業内容は質屋のほか、酒・紙・油等、銭貨を以って取引する日常雑貨の小売業を本業とするものが多く、その売溜銭の売買・両替の必要からの副業的要素の濃いものであつたことが指摘されているが、⁽²⁰⁾その惣人数の時間的变化は把握し難い。

ところで、両替屋役金の申渡しが行なわれた前年の安永九年六月、江戸市中の両替屋の惣人数の書上が実施され、つづいて同年十二月、享保三年両替株限定発令の再確認する旨の仰渡されがあつた。享保度町方六〇〇人、寺社門前

三五人の定数はそのまゝ踏襲されたが、今回は寺社門前の分も町奉行管轄下に置かれた餽がある。そして都合六三五とする株数が現業人数と一致していたかどうかは疑問の余地があるが、当時の三組兩替の一員播磨屋新右門店の「日記」安永九年六月九日の条によると、無天秤商売の取締りを三組番組五五四人の者共一同が願出たところ、「名前書上願之通被仰付」とあり、この時の総人数の書上を役銀賦課のための前提作業とみるのは早計で、脇兩替側からの要望によって行われたものらしい。この名簿提出作業の課程で、無天秤商売の者の組合加入が促進され、三組へ六人、番組へ三一人の加入があつたことが記されている。これで当時六人の本兩替を合計すると五九七となるから、何時の頃からか生じていた空株の多くが、この惣人数の書上げによって、ほぼ定数を満たす結果となつたことが判る。ただし、三組・番組人数の内訳は不明であるが、宝暦期の三組の人数が六〇前後であつたことが、番組人数を推測する凡その目安となる。何れにしても、営業規模・内容を異にするとはいえ、本兩替・三組・番組兩替とも、この度の役銀の下命は一樣に迷惑この上もない事態であつたことは想像に難くないのであつた。

三

天明元年八月に始まつたこの役銀一件は、その納入の割当法をめぐって延々一年六カ月の折衝を経て、漸く初回の役金上納にこぎつけたものの、その額が幕府の期待した金額に達せず、更に一年八カ月を経過して、役銀割当基準を「天秤役銀」という形式に根本的に修正するに至るのである。以下その顛末を、町奉行所側の史料と、江戸兩替商のうちで少人数とはいえ主導的地位を占めていた本兩替仲間の行事記録によって追つてみることにする。

兩替役金の担当所管は南町奉行所（奉行牧野大隅守成賢）で、同所で申渡しを受けた惣兩替屋仲間の各行事は直ちに請書の提出を命じられた。そして日延べを願う行事たちに対し、掛り与力山本茂市郎は「右被仰渡候御書面之役銀

員数何程出候儀哉難相知、殊ニ金匱兩ニ付銀壹分・錢拾文増歩差免候訳も、いか様之致方ニ仕候哉、御書面ニも見不得候故、逐一に後藤庄三郎方ニ相尋、其上ニ而兩替屋共難設之筋有之候ハ、御訴訟可申上旨被仰渡、一と先ず請書に調印するよう説得したため、已むなく各組行事たちは同日調印して帰宅したのであった。實際、申渡しには肝心な役金額が示されていないのみならず、後藤との交渉を命じているものの、幕府への上納金か後藤への上納金かすらも明示されていない。

兩替屋と後藤役所との交渉は、三日後の八月二十四日に初回がもたれた。その節後藤側が兩替屋中へ対して出した要求は、①過去十年間の金銀錢売高、②過去五年間の同平均高、③去年（安永九）一年間の同高の書出である。役金高取極めの根拠を兩替商高に求めようとするこの後藤の申出に対して、殆んどが副業として錢兩替を営む番組兩替は帳面不所持を理由に拒否し、これに便乗する形で本兩替仲間も応諾を与えず、後藤方から、何回かの督促を受けたのち、本兩替仲間は九月八日に町奉行所へ訴願を提出した。願書は八月二十一日の「被仰渡」の趣旨を前文に掲げたのち、次の通り三カ条の理由を挙げて、兩替商高を基準とする役銀賦課に反対している。

（前略）

一右被仰渡之趣、先月廿四日後藤庄三郎役所も同様申達有之ニ付、即答役銀高何程差出候義哉と承候所、其儀は不申聞、私共仲々間兩替商高十ヶ年已来又は七ヶ年五ヶ年、若不相知分は三ヶ年式ヶ年ニ而も兩替高有躰ニ相調書出候様申聞候、私共兩替高有躰ニ書出候而は諸商人之代口物売高書出し同事ニ而金銀を代口物に取扱仕候義故、何程と申儀世間ニ相知レ申道理ニ而、誠ニ銘々身上を探候同前之儀ニ御座候得は甚迷惑仕候、右兩替高之儀は私共仲々間中ニ而も相互ニ秘合候儀ニ御座候得は、兩替商高書出候而は私共身上向甚指障り候義共有之、迷惑至極仕候間、商高書出候義難義之段申達候処、左様ニ而は相済不申、是悲何れ共書出候様ニと申聞候ニ付、無是

悲乍恐奉願上候、右奉申上候通、私共兩替高書出候而は已後商方手狭ニ相成可申哉、左候時は自ラ渡世ニ相障リ難義至極奉存候間、何卒御慈悲を以兩替高書出候義、乍恐御免被成下候様奉願上候

一以来銀は沓分、錢は拾文を限り増歩を以売買可仕旨被仰渡、冥加至極難有仕合奉存候、然共兩替商売之義は聊厘毛を相争ひ売買仕候義ニ御座候得は、甚利細之商売牀ニ御座候、私共商之義は是迄仲ヶ間内取遣り、譬ハ金沓兩ニ付銀五拾九匁仕候得は式分之歩ニ仕、沓分引売上と定、沓分増買上ト相定御書上仕、右相庭之中程を以売買仕候義故、沓分之増歩御免被成下候而も、中相庭ニ相拘り不申哉、乍恐奉存候、私共商売牀之義は外商売と違ひ、日々相庭之高下も有之候故、今日買請候銀子元手金ニ差支候得は、明日損毛有之候而も売渡候義ニ御座候へは、極而利徳有之と申義ニは無之候、勿論素人より買請、素人ニ売渡候義も御座候得共、兩替仲ヶ間之義ハ諸方銀為替取遣り重ニ売買仕候義ニ御座候得は、至而利薄ニ取扱仕候義ニ御座候、勿論素人売買之銀子迎も、其人々所々相庭承合、少しニ而も勝手宜方ニ持参仕、兩替致候義御座候得は、私共可成はとは売買之間を詰兩替仕候候義ニ御座候、此度沓分之増歩被仰付候通売買仕候ハ、以後御屋敷方并諸商人迷惑之筋ニも相成可申哉、殊ニ御当地は上方と違ひ、重に小判通用ニ而銀之取遣りハ無数御座候得は、銀遣之御屋敷方も自ラ金遣ニ可相成哉、左候而は往々私共商売牀ニ相障り、少分之商徳を以商高ニ応シ役銀差出候義難儀至極奉存候

一瑕金輕目金、已来は金座ニおゐて無代ニ而相直候様被仰付難有奉存候、右瑕金輕目金前々御触も有之、當時通用無滞様ニ奉存候、尤御触已上之瑕金輕目金は是迄金座ニ直シ代差出し直来り、指障りも無之様ニ奉存候、勿論瑕金輕目金私共必金座へ直シニ差出候高、年中ニハ格別之員数ニも無御座候間、此義は是迄之通り直代分量ニ応シ金座ニ差出し申度奉存候、奉恐入候得共何分是迄之通被差置被下候様奉願上候

前書奉申上候通、甚奉恐入候得共、私共商高書出候義ハ銘々身上牀ニ相障リ甚難涉至極仕候間、商高ニ応シ役銀

差出候義共、何卒御免被成下、是迄之通ニ被成置被下候様、乍恐一統御慈悲奉願上候、已上

本兩替町駿河町本兩替屋

天明元丑年九月八日

行事 勘 四 郎 印

同断 庄 左衛門 印

幼年ニ付 代伊兵衛 印

次郎右衛門 無印

京都住宅ニ付 代五兵衛 印

三 九 郎 印

善 次 郎 印

喜 三 郎 印

御 奉 行 所 様

第一に挙げているのは、商高は企業秘密に属し、その書出を拒むことは営業上の権利であるという主張である。仲間記録によると、この主張は過去に木綿商高の書出を拒否して認められた三井の体験に裏付けられたものであったという。²⁴ 反対理由の第二は、役金捻出のための措置として認められた兩替増歩に現実性がないという点である。この主張の中で専ら金貨が通用する江戸における本兩替屋の金銀兩替は同業者間の銀為替決済を主とするもので、通用金銀の交換は少なく、同業者間の取引に公認の切貨は無関係だと述べているのが注目される。そこに強弁が存することは勿論ではあるけれども、江戸の兩替業務の一面が含まれていると思われる。また瑕金・輕目金の直シ賃無料化の不要

性を挙げて、かねての幕法の趣旨に矛盾する旨をさり気なく指摘しつつ、現行通りの有料の直シ金に据えおくべきことを主張している。後段に触れる通り、現行の有料制は修理に要する期間が長引かない限り、両替商にとって不利ではなかったのである。

要するに、九月八日付の本両替仲間の請願は強引なまでに自己主張を明白に表明して、商高を基準とする役銀徴収に反対した内容を盛っている。それは恐らくこの度の役銀が公儀上納でないことを悟ったためであろうが、これ以後の後藤方からの督促に、この請願に対する町奉行所の御下知次第との遁辞をくり返し、ひと月後の十月十六日に奉行所より再度後藤方と対談の上での再願を促されても、歩み寄りの気配を見せなかった。のみならず十二月十九日には町奉行所に対して、渡世の差障りを理由に役銀御免の願書を正面から提出した。その間の本両替と後藤との交渉の一端を紹介すると、行事記録の十一月二十八日の条には

一同廿八日後藤^五罷越候処、先達^而商高書出候様申渡候所、難決之由、左候ハ、銘々商高印封ニもいたし被差出候ハ、仲々間へ商高相知候事も有之間敷、此方^も懸り役人之外他見致ス間敷候間、右人別ニいたし被差出候様申渡候へハ、是迎も難決之由断申入られ候段、聞届候、依之先商高書出候義ハ其分ニ致置、扱右ニ付今日改テ申渡候義ハ此度御役銀被仰付候ニ付、銀は沓分之増歩御免被仰付候へハ、右沓分之割合ヲ以銘々商高ニ応し役銀何程ニ相成候哉、其方仲々間中一鉢ニ取極可申聞段被申候ニ付、沓分之増歩私共方ニ徳用有之様被思召候得共、徳用ニハ相成不申段色々申入候得共、兎角承知無之(下略)

一同夜又々金座へ罷越、先刻後藤御役所ニ而被仰聞候趣ニ而ハ、私共御役銀差出候義承知ニ相決居候様被存候得共、承知仕候義ニ而は無之(下略)

とあつて、商高届出から一分増歩による利益額の届出へと手法を変へてきた後藤方に対して、妥協の色をみせないば

かりか、役銀差出そのものを承諾したわけではないと居直っているのである。

この間、最初から役銀割合法を後藤と両替商の交渉に委ねていた町奉行所は、依然として直接の介入を避け、十二月十九日に本両替仲間から役銀免除の願書が提出された後も沈黙を続けていたが、五カ月を経た天明二年四月二十六日に至つて本両替仲間行事を呼出し、増歩に関する両替屋の主張の詳細な説明を求めると共に、仲間から金座へ差出す年間の直シ金の員数と、それによつて両替屋の取得する益金、および素人の両替商売を厳禁すれば仲間商高の増加に効果があるかの三カ条についての答申を求めた。これに対する五月朔日付の答申で、本両替仲間は次の通り述べている。

一右被為仰渡候宍分之増歩、両替相場ニ不相拘訳、譬は当日相庭五拾八匁九分九厘、五拾九匁宍厘、如此段々売買仕、右五拾九匁を中墨ニ相定、御書上仕来候、私共仲々間売買仕ゆ処、左ニ奉申上候

一御書上相極候相庭之元

金匁兩ニ付銀五拾九匁中墨是を元立ニ仕

今日相場

金匁兩ニ付銀五拾八匁九分

売上

中墨元五拾九匁

金匁兩ニ付銀五拾九匁宍分

買上

右之通書上置、私共売買仕候処、左之通り

金匁兩ニ付銀五拾八匁九分九厘

売

中墨元五拾九匁

金壹兩ニ付銀五拾九匁壹厘

買

右之振合を以仲ヶ間売買仕来候、御書上ニ相違仕候様ニ相見得候へ共、日々相庭之高下ニ寄、増減は可有御座候得共、元立之仕方は動キ不申候

此度壹分之増歩御免被為仰付候処、左之通相成候

一御書上ニ相極候相庭之寛

金壹兩ニ付銀五拾九匁中墨是を元立ニ仕

今日相庭

金壹兩ニ付銀五拾八匁八分五厘

売上

中墨元五拾九匁

金壹兩ニ付銀五拾九匁壹分五厘

買上

但此相庭ニ而売上候得は仲ヶ間商内ノ徳分多キ様ニ相見得候得共、徳分ハ有之候ニも限り不申候、左之相場ニて買候へハ三分方相残り候得共、銀子有無之時節、又ハ銀高ニも寄徳分之處定り候義無御座哉奉存候

右之通書上置、私共仲間取遣候所は

金壹兩ニ付銀五拾八匁九分九厘

売

中墨五拾九匁

金壹兩ニ付銀五拾九匁壹厘

買

但売渡候義、仲ヶ間之外は至テ無數、素人ノ買入候銀子も元手金ニ差支候節は少々損毛有之候而も仲ヶ間ニ売渡申候、此損徳ハ相極り不申候へ共、御当地は金通用重ニ御座候上、外商売と違、売と買と両方不仕候而

は徳分無之商売牀ニ御座候

右之通之中墨ニ壹厘貳厘或は三四厘程宛之歩ミニ而売買仕来候、尤貳分之歩ニ不相用と申ニ而は無御座候得共、少ニ而も兩替ニ參候者勝手ニ成候事故、直段之所所々聞合候ニ付、自ラゆるかせニ仕候得は私共商売牀日々衰微相成候ニ付、自然と世利合候而売買仕候、壹分之増歩被為仰付候而も、仲ヶ間売買并ニ素人商共相拘不申哉ニ乍恐奉存候、當時御上諸色御用代銀も大方ハ貳朱判ニ而御払、御用代銀子にて出候義は甚無數御座候、銀子取遣次第ニ薄相成候故、近年兩替屋不繁昌ニ相成、其上御屋敷様方之御払銀、其節入札等仕候義、右中墨相庭が五七厘又は壹分貳分位宛も運送入用込、自分々之存寄次第入札仕候義ニ御座候、勿論其節銘々銀子入用ニ差向候者と銀子不用之者と銘々存寄次第入札仕候義ニ御座候、是以日々相庭高下御座候ニ付損益之処難計奉存候、随分銘々出情入札仕、渡世仕候義ニ御座候、増歩五厘之処右買請相庭に指加へ銀買請候様仕候ハ、五厘丈ヶ御屋敷様方御不益ニ御座候、右申上候通、御用代銀出方無數、其上銀遣ひ之御屋敷様方も金遣ひニ相成候而ハ難義至極奉存候、上方引請申候諸商人共諸代口物売買仕候も、銀之相庭算用ニ込利潤相考商売仕候義ニ御座候得は、右五厘丈ヶ自然と諸代口物にも相響、世上一統難渋可仕哉、右ニ順シ兩替屋共商売牀自然と不繁昌可仕哉と歎ヶ數奉存候一素人ニ而兩替商売仕候者御差留被仰付候ハ、私共商内高増可申哉と被為遊御尋難有奉存候、然共御当地は金通用勝ニ而銀遣は稀成儀ニ御座候故、縦素人ニ而銀売買仕候者御座候而も、詰り兩替牀へ持參可仕哉と乍恐奉存候、左候得は商高ニおるても多少は御座有間敷様ニ奉存候一瑕金輕目金私共仲ヶ間が金座に差出候は、段々と溜置、百兩貳百兩ニ至候而直シニ指出、尤日數相懸り直シ出来仕候、去丑年中瑕金高左之通リ

一瑕金千五百兩程 金座に差出候

此直代貳貫百目程

一 瑕金千五百兩程 素人ノ買入私共請取候

此直代貳貫五百五拾目程

直シ代差引ベテ四百五拾目程 徳分ニ御座候

凡右金座直シ代ノ者兩ニ付三分程宛徳分御座候、然共別段奉申上候通り、日数相懸り候ニ付歩合同様之儀ニ御座候

右之通瑕金買入候得共、瑕金之義は全商売ニ仕候と申事ニは無御座候、金座立取次同様ニ古來ノ相心得罷在候、此段御尋ニ付奉申上候

前書奉申上候通、増歩被為仰付候処、私共難渋奉申上候段、甚恐入奉候得共、右増歩私共助成ニ相成不申段、相訳り候様可奉申上旨、訳而被為仰付候ニ付不願恐奉申上候段、何分御免被成下被為聞召分被下置候様、乍恐奉願上候、以上

天明二寅年五月朔日

本兩替町駿河町

本兩替屋行事

勘 四 郎

代 喜平次

庄左衛門

代 伊兵衛

御 奉 行 所 様

天明朝江戸兩替屋役金一件（鶴岡）

長文を厭わず延々と引用したのは、薄利を強調するための粉飾はあると思われるものの、返答書の諸処に当時の江戸本両替の營業の機微に触れているところがあると思われたからである。

例えば本両替が行なってきたている金銀相場の書上と現実の取引価格との関係がある。すなわち書上相場は当日の相場の仲値（中墨）を示した上で、売買の間に式分の差をつけて書上げるもので、売買の実価を示すものではない。仲間取引の実際は一、二厘ないし三、四厘の差額で売買されており、御屋敷方の御用も同業者の競争入札によって行なわれるから、歩銀は至って薄利であると述べている。これは江戸の本両替屋が行なう金銀売買の歩銀は、個々の業者の当面の銀需要の多寡によって決まるもので、法定の許可限度額とは無関係であり、売買の損益は相場そのものの変動によって生ずることを説明しているのである。そして仮に法定の増歩を勵行すれば、御屋敷方は不利益を蒙るであろうと警告しているのは正しいが、それによって銀の御払いが差控えられると、南鐐二朱の増加以来著しい銀流通の減少に拍車をかけ、銀高となつて諸物価の上昇をもたらし、世上一統の難渋につらなるとまで論旨を展開しているのは、強弁の感を脱れないように思われる。また町奉行所の両替屋に対する一種の慰撫策ともとれる素人の両替商売の禁止に関する諮問に、素人の金銀売買も結局は自分たちが手掛けることになるのだから影響なしと答えているのは、錢両替と一線を劃した本両替の立場の表明である。

なお瑕金の直シ金についての具体的な答申には恐らく実情に近いものがあると思われる。そこでは前年度の年間直シ金を約一、五〇〇両、それによる金座の所得を銀約二貫一〇〇目といっている。仮にこの数字が実数に近いとすれば、瑕金の直シによる金座の所得は年間僅かに三五兩程度に過ぎなかったことになる。この数字と並べて記している両替屋の瑕金買入差額や、金座直し料との差から生ずる所得額は疑わしく、いずれにせよ幕府が役金上納の代償とした瑕金直し金の無料化は、本両替屋にとって無意味なものであったことが知られると同時に、永く金貨改鑄の途絶え

た金座の困窮の一端も推測される。

さて、このような頑強な反論をくり返す態度に業を煮したと思われる町奉行所は、天明二年五月二十六日に至つて、老中田沼主殿頭・側用人水野出羽守に対して、次のような伺書を提出して指示を仰いだ。

両替屋共々金座に役銀差出候儀ニ付、先達而松平右京大夫殿御書付被仰渡候通、両替屋共呼出申渡、後藤庄三郎方ニ度々差遣、追々対談為仕候得共、兎角申談之趣行届不申候、尤右は両替之増歩御免被成下、役銀差出候儀ニ候間、右増歩分両替屋共銘々身分ニ差出候と申道理ニ無之、其上取金輕目金無代ニ而相直候間、可相障様無之処難儀之趣申立、庄三郎方ニ而申談逆も相整申間敷様子ニ奉存候、依之両替屋共呼出利害申聞吟味詰、役銀高相極次第私御役所ニ取立、庄三郎方ニ相渡候様仕候ハ、右御書付之趣とハ取斗方訳違申候間、此段奉伺候、以上

寅五月

牧野 大隅守

後藤庄三郎と両替商との交渉によつて役金割当法を決めさせるという既定方針は、両替屋の反対のために解決の目途がない。この上は町奉行所が表面に出て、役金額とその割当法を強制的に決定し、且つその取立も奉行所が行なつて、後藤方に渡すはかはないと述べ、当初の方針を変更する許可を求めたのである。この伺に対して、老中田沼は六月十五日に「書面取斗方之儀取調、先相伺候様可仕」と、具体案を策定して伺出ることの指示を下したのである。

この老中指示に基づいて、同年八月二十九日町奉行所は惣両替屋へ対し、過去二年間の商高の書上げを致命した。これまで後藤方からの要請に抵抗を続けてきた本両替仲間も、町奉行所の下命には抗し難いと判断し、提出期日の九月五日に商高の書上を個別に封印の上、それぐの町名主へ提出している。⁽²⁶⁾

かくして天明元年八月の最初の申渡から一年余を経た同年十一月二十八日に、町奉行所は名主・家主・五人組同伴の両替屋中に対して、両替増歩と取金直シ無代の冥加として、役金一カ年一万五千兩宛、十カ年間の月割上納を命

じ、名主に毎月二日納入の役金取立掛りを命じたのである。

年一万五千兩という役金高は何を根拠にして決定されたのであろうか。下命に先立つ同年十月十五日に、町奉行から、側用人水野出羽守に提出し認可された内伺書は次のようなものである。

兩替屋共金座に役銀差出候儀、先達而御書付之趣申渡候處、品々難儀之旨申立候間、本兩替屋并錢兩替屋廿六組上野領・牛込済松寺領に罷在候錢兩替屋共、当時都合六百三拾壹人銘々去々子・去寅兩年分兩替高為書出、致平均候處、壹ヶ年之兩替高都合金百九拾八万千百四拾七兩貳朱に而御座候、右金高を以為役銀金壹兩に付銀壹分宛之積取立候得は金三千三百壹兩三分余罷成候、併右書出候兩替高は銘々申立候而巳に而虚実之儀難相知候、然共此儀相糺候而は役銀取立之儀に相障可申奉存候、孰も右之通此度兩替之増歩御免被下候上は増歩は全世上に相掛候義に而兩替屋共身分に差出候筋無之旨、得と利害申聞候處、何も得心仕、難決仕候もの當時壹人も無之旨申出、尤役銀申付次第可差出由申候に付、右瑕輕目金無代に而相直、且増歩被成下候歩合相考、役銀壹ヶ年二壹万五千兩ツ、拾ヶ年之内年々当御役所に差出候様申渡、尤兩替屋共居所支配之名主共は取集方掛り申付、当御役所に為相納候上、後藤庄三郎方に相渡可申と奉存候、右役銀納方之儀取極り候上は庄三郎方に直々為相納ひ様可仕候、依之此段御内々奉伺候、

(朱書)

「但役銀取立方年限無御座候而は上納仕候もの共、際限も無之儀に存候而は如何に奉存候間、先ツ拾ヶ年之相定申上候儀に御座候、尤年数相立候ハ、其節又候年限被仰付候方可然哉に奉存候」

寅十月

牧野 大隅守

この伺書をみる限り、一万五千兩という金額は帰納的に算出された数字ではなく、恐らく幕閣当局から指定された

ものであったと推測される。何故なら文中にある通り、金額策定のために市中の惣両替屋六三一人から提出させた安永九・天明元両年分の両替高合計の年平均は金一九八万一、一四七両二朱であり、これに相当する増歩は三、三〇一両三分余にしか達しない。町奉行所はこの金額が両替屋各自の申告であって、虚実の裏付けがないという理由で、書上数値の五倍に当る一万五千両を唐突に査定したのであった。

惣両替屋が書上げた安永九・天明元両年の両替商額の明細を示す史料は得られないが、そのうち本両替屋（六軒）の書上分は第4表の通りである。その一カ年平均総額は二〇万〇五六〇両余となるから、総両替屋分の一九八万一、一四七両の一〇・一％に当るわけである。

（従って、銭両替の平均年商額は一七八万〇五八七両）。そして本両替屋の商高に仲ヶ間分と素人分の内訳が示されているのは、同業者間取引の歩銀が極めて少ないという上述した両替屋の言分に対応するもので、圧倒的な部分が同業者間の取引によって占められていることを数字で示そうとした作爲が存したものと思われる。因みにこゝで素人取引というものの内実は明らかでないが、問屋商人らの営業上の必要による両替のはかに、投機

第4表 本両替仲間両替商高（但銀亮高）

天明2年9月11日書上

	安永9子年 (内訳 a 仲ヶ間人 b 素人)	天明1丑年 (内訳 左=同)
三 谷 三九郎	36,020-0 (a 33,300 b 2,720)	38,730-0 (a 36,900-0 b 1,830-0)
三井次郎右ヱ門	29,561-1 (a 29,200 b 361-1)	12,159-2 (a 11,900-0 b 259-2)
三 谷 勘四郎	11,229-1 (a 9,099-0 b 2,130-1)	12,051-1 (a 9,100-1 b 2,951.1)
三 谷 普次郎	43,790-0 (多分仲ヶ間)	40,570-0 (多分仲ヶ間)
三谷 庄左衛門	3,080-0 (a 2,750-0 b 330-0)	7,160-0 (a 6,720.0 b 440.0)
三 谷 喜三郎	91,000-0 (多分仲ヶ間)	75,770-0 (多分仲ヶ間)
計	214,680-2	186,440-3

三井文庫所蔵「両替商ひ高書上之控」(史料番号 536-1)

的な貨幣相場取引を行なう一部町人の商行為がその中に含まれていると思われる。これらの数値は、まさに町奉行所の云う通り「虚実之儀難相知」ものではあるが、江戸の本両替屋の両替業務が銀為替の取組みや決済との関係を主として営まれていた特性を示すものであることは認められると思われる。また当時の本両替仲間には三井と三谷一統だけでなく構成され、取引の九〇%近くが三谷一統によって独占されていた状況を知ることができる。⁽²⁷⁾

四

さて、以上の通り実態調査に基づくと言いながら、それと無関係に一万五千兩の役金額を一方的に強制査定をしたものの、町奉行所はその業者間における分担方法については、全く見通しを持つものではなかった。現に、役金高一万五千兩を申渡したことを報告した十一月二十九日付の側用人・若年寄宛の町奉行届書にも「右は多人数之儀、割合等急ニ取調出来不仕候間、名主共之内掛り申渡、来卯正月より月々取集、私御役所ニ為相納、後藤庄三郎ニ相渡候様可仕候」と述べているに過ぎなかった。その後の経過をみると、南町奉行所の掛り手力山本茂市郎が十二月朔日に本両替屋と錢両替仲間行事を呼出して、割合法の決定の督促をしている。その折の模様を本両替屋行事は次のように記録している。

山本茂市郎様被仰渡候ハ、一昨廿八日其方共へ御役銀被仰付候金高壹万五千兩、一統割合之義いか、致シ相納候哉、錢兩替屋共ニも呼出し相尋候処、多人数故未相談不相決候ニ付、来八日ニ割合等之義可申上段申候、其方共之存寄ハいか、ニ候哉、所存可申上之段被仰候ニ付、私共義は取集御懸り被仰渡候名主共ニ割合いたし、申聞候義と相心得罷在候段申上候処、夫ハ心得違ニ而候、名主共へハ取立役ヲ被仰付候、割合之儀ハ兩替屋共一鉢ニ被仰付候へハ、多少割合其方共申合割合いたし相納可申事ニ候、錢屋ニハ一向掛合も不致哉、兎角別ノニ致候而

ハ割合出来申間敷候、此方ハ差図ハ成り不申、御上ニ而ハ縦令_レ屯人_レ屯万五千兩相納候_レ迎も御構無之候、右金高之内何程本兩替屋ニ而_レ出シ、何程ハ番組之方ニ而_レ出シ可申と申候_レ而も、屯方ニ而も取心無之候_レ而ハ割合難出来事ニ被_レ存候、番組ニ懸合いたし割合取極、一統ニ可申上段被_レ仰渡

要するに、奉行所としては惣兩替屋に課した年間一万五千兩の役銀が完納されればよいのであつて、その割付法には関与しない。極端にいえば、特定個人が単独で納入してもよいのだとまで言っているのである。そして本兩替屋が主導して錢兩替との負担割合を決定して報告せよと命じたのである。掛り与力の山本は、一方で錢兩替二七人の行事に対して「多人数ニ候へハ平之者一統ニ相談ヲ致候_レ而ハ相極兼可申間、其方共廿七人計談合仕、ケ様にも仕候ハ、一統得心いたし、御役銀高都合ニ上納相成可申」と差図している。

しかしながら、もともと業態の異なる本兩替屋が錢兩替屋を統御する立場にはなかつたし、またそれぞれ異なつた本業をもつ六〇〇人近い錢兩替の意志を番組行事が統一する力を持つものではなかつた。しかも事は新規で高額な役銀割付という切実な利害にかかわつてゐるのである。特に一万五千兩の額が商高という基準を離れて決定されたことが、事態を一層混乱に陥れてゐたと思われる。

この時点で交渉の主導権は、数の上で圧倒的多数を占める錢兩替の側に一時的に移つたと思われる節がある。しかもその意見は統一されず、申告期日の十二月八日に提出された番組の訴状は九通にも及んだという。そして同日本兩替仲間が提出した願書は、錢屋仲間の多数意見に便乗した形をとつた次のようなものであつた。

一右御役銀高割合之儀は兩替屋共一鉢取極メ仕可申上之旨被_レ仰渡候ニ付、仲々間一統談合仕候所、右御役銀高乍恐
広大之御儀ニ付一同当惑至極仕候、然レ共被_レ仰渡候趣奉_レ恐入候ニ付、錢兩替屋共ニ申談、御定天秤数ニ割合、十
ヶ年之間上納可仕哉之段談合仕候處、当分難_レ済仕候者有之候間、錢兩替屋共御願申上候趣を以、上納方御聞濟被

下置候様、一同御慈悲奉願上候

ここで「錢兩替屋共御願」といつている内容は、役金高一万五千兩は、天秤一挺に割付けると凡そ二五兩となるから、その十分の一の二兩二分を、年一万五千兩の十年分、一五万兩に達するまで年々上納しつづけるというものである。錢兩替屋の申請通りとすれば、役銀の年額は一五八七兩二分に過ぎず、一五万兩に達するには九五年近くを要する計算になる。これでは年一万五千兩を十年継続し、期限に達した際、年限の延長を行なうことを予定している幕府の意向との間に懸隔があり過ぎるとみた本兩替仲間は、この間に一万五千兩を天秤定数六三五で頭割（一挺二三兩余）とする試案を三組・番組へ提示したことがあったが同意を得られず、撤回した経過もあった。

町奉行所は三組・番組両仲間から提出された九通と共に、本兩替屋の願書も即時「下げ戻し」即ち却下した。そこで本兩替屋は、さきに錢兩替屋に内示して同意の得られなかった御定兩替屋六三五軒頭割（一人二三兩二步七匁三分余、本兩替六人分一カ年一四一兩二步銀一三匁余、十カ年都合一四一七兩一步銀三匁余）上納の仕法を、翌九日に単独で提出した。本兩替と錢兩替の共同歩調を、本兩替はこの時点で放棄したわけである。この日は願書の提出だけでは済まされずに御白洲となり、町奉行自身が出座して

其方共義年久敷商売仕候義、何様之義被仰付候共御請可申上筈、殊ニ此度被仰出候御役銀、増歩御免被成下候へハ強テ難渡之筋ニ而ハ無之、世上に取集候而上納仕候様成事ニ候へハ難有奉存、御請可申上筈ニ候、商高に願シ割付可申付

との申渡しを受けた。上納額こそ異なるけれども、錢兩替・本兩替とも、「天秤割」「頭割」の均等割付を申請したのを拒否して、町奉行所は再び商高基準の割付法の原則を持ち出したわけである。しかも掛り手力に代って白洲において町奉行自身が申渡したことは、これ以上の異議の申立てを許さない強硬な態度を固めたことの表現として本兩替屋

にうけとられた。町奉行所はこれにつづけて同十九日に名主を通して、来卯正月からの増歩の実施と、正月分以降翌月五日ごとに両替商高の書上を命じている。

このようにして、増歩益金による役銀の商高割付の原則が不動のものとなったと解した本両替仲間は、増歩の適用を素人商内に限定して役金額の減額を出願したり、増歩を売一方につけて売高としてきた書上方法を改めて、増歩は売買双方へ五厘ツ、付け、売買高の合計を二等分した数字を商高として書上げることによって役銀額の減少を計るなど、なお執拗な条件闘争を続けていた（注（28）参照）。

しかし、この段階で幕閣が役銀一万五千兩の額と、均等割を排して商高を基準に取立てる方針を既定方針としていた事実が、天明三年二月七日付で側用人水野出羽守から町奉行に達示された次の御書付によって知られる。

天明三卯年二月七日水野出羽守殿御直御渡

後藤庄三郎方々相納候両替屋役銀之儀、両替屋共差出候両替高は難相用候ニ付、壹々年金壹万五千兩為差出候積、先達而相極候、然処右金高人別ニ割合候而は両替高之多少ニ寄、難差出ものも有之、差支候儀ニも可有之哉ニ候間、先達而両替屋共差出候銘々両替高多少ニ准、壹万五千兩を割付、役銀為差出可然哉之旨

それにも拘わらず、二月四日各名主へ商高の書上げを済ませ、既に役銀上納を覚悟していた本両替屋は、同月九日に名主から役金の上納は御下知があるまで差控えるようにとの指示を受けている。その際の名主の説明によれば、上納の一時延期は銭屋から仲々間商い分の増歩免除願いが出されていたのであるという。役銀一件のそもその初めから強硬な反対者を含んでいた銭両替は、この時点でも本両替に比して、なお強い抵抗を続けていたことが知られるが、銭屋側の記録が見出せないため、その詳細を明らかにできない。

このような一時の曲折を経ながらも、役金の第一回上納は結局仲々間商分を含む正月商高の増歩分一分（一兩につ

第5表 天明3卯年正月分書上の両替高并増歩高
 (「安永撰要類集」金銀銭両替之部より)

	銀 両 替 高 (A)		銭 両 替 高 (B)		(A)+(B)	
仲 間 売	金 30,947-3	匁 7.41	33,059-3-2	兩歩朱		
素 人 売	* (8,502-2	11.995)	56,946-3-2			
計	39,550-2	4.45	90,006-3		129,557-1	匁 4.405
此 増 歩	65-3	10.057	** 163-2	匁 8.918	229-2	3.975

* の数字は原史料脱落につき推算, ** は銭 900, 匁 067文 (1両=付5, 匁 728文替)

◎ 229,566両×12カ月=2,754両

き銀一分の割)の割合で、二月二十四日に行なわれた。そしてその上納額は同日付で町奉行から側用人へ提出された報告によれば第5表に示す通り、本両替・銭両替全体の増歩上納高は二二九兩二歩銀三匁九七五であった。商高は月によって異同があるとしても、単純に十二倍すると年額二、七五四兩に過ぎず、役金高一万五千兩とは程遠い額である。割付法の再検討がこの直後から急がれることになったであろうことは想像に難くない。

因みに、第5表では商高を銀両替高と銭両替高とに二分した上で、それぞれの仲間売・素人売の内訳を示している。この場合の銀両替・銭両替は、仲間としての本両替・銭両替とは別のものである。何故ならば、本両替屋仲間の記録によると、天明三年正月分の申告商高は一万七二七八兩二歩で、その増歩役銀額は銀一貫七二七匁八分五厘であつて、第5表の銀両替高三万九五五〇兩二歩より著しく少額である。両者の差額は、本両替以外の両替商が行なつた金銀両替の額と推測して大過なからうと思われる。そして、この部分は銭両替と金銀両替を併わせ營んでいた三組両替の金銀取引であつたと推測され、三井と三谷一統に限定されていた当時の本両替よりも大きな規模の金銀取引が三組両替によつて営まれていた事実を示すものと思われる。事実、当時四〇人で構成されていた三組両替には、後年文化五年になつて本両替仲間に加した升屋源四郎・殿村佐五平・竹原文右衛門・播磨屋新右門らの有力両替商が多数含まれていたのであつた。⁽²⁹⁾

第5表から窺われるもう一つの点は、銭兩替の商高の著しい減少である。すなわち、既述の安永九・天明元兩年の銭兩替屋平均年商額一七八万〇五八七兩の月割は一四万八四〇〇兩近いのに、天明三年正月の銭兩替高（銭兩替屋商高ではない）は九万兩に過ぎず、これに金銀兩替商中の三組扱分を加えたものを銭兩替屋商高としても、一万二千兩余にしかならない。つまり前二年間平均に比して、約二五%も減っているのである。この銭兩替商高の減少の原因を速断することは慎まなければならないが、役銀上納に強硬に反撥した銭屋の一部の中から、天秤を返上して廃業する者が早くも相当数現出したことを推測させる。それは次に引用する町奉行の側用人宛の伺書から窺われるのみならず、後段に触れる通り、空株に対する措置の必要を生じた事実があるからである。この点に注目するのは、兩替役銀の賦課という幕府の政策で、零細業者の切捨てをもたらしただけであることを示すものだからである。

さて、商高を基準とする増歩分上納の方式をとった第一回徴収額の意外の低額さに驚いた町奉行所は、急遽割付法の修正に着手せざるを得なかった。すなわち、第一回上納の僅か三日後の二月二十七日に、三月四日を期限に、去年一カ年分の兩替高の家別書上げを命じ、更に三月四日には組合内の上ヶ天秤数の調査を命じており、それらを踏まえて、同月二十九日町奉行は側用人水野出羽守に宛てて次の伺書を提出した。

先達而被仰渡候後藤庄三郎方ニ相納候兩替屋役銀之儀、兩替屋共差出候兩替高は難取用候ニ付、屯ヶ年金屯万五千兩為差出候積先達而相極候、然処右金高人別ニ割合候而は兩替高之多少ニ寄、難差出ものも有之、差支候儀も可有之哉ニ候間、先達而兩替屋共ニ差出候銘々兩替高多少ニ准シ屯万五千兩を割付役銀為差出可然哉之旨被仰渡、割合仕候処、左之通御座候

右兩替屋共役銀惣人数六百三十拾屯人之内、商売相止又は相休候もの共相除、残而五百八拾三人之もの共、去寅年屯ヶ年之商高為書出、右高ニ役銀屯万五千兩を以、銘々商高ニ応シ割付候処

上之分商高金七万貳千七百八拾兩貳分貳朱

此役銀五百九拾八兩銀八分四厘

中之分商高四拾貳兩貳分（三万六千六百九拾貳兩弱之注、該数字は「下之分」と同額、書写ミスか、脇注の数字は引用者の推算）

此役銀三百壹兩壹分銀拾四匁分五厘

下之分商高金四拾貳兩貳分

此役銀壹分銀五匁九分五厘

右役銀割付高は壹兩ニ付銀四分九厘三毛ニ相当申候、増歩御免之高金壹兩ニ付銀は壹分ニ有之候処、壹兩之当り三分九厘貳毛余多相掛申候、然処右貳毛余ニ而は惣高壹万五千兩之内相減候間、貳毛余之処を三毛宛ニ致候得は、壹万五千三拾兩銀九匁四分五厘ニ罷成候、尤右は寅年壹ヶ年之商高に割付、書面之通ニ御座候、然ル処増歩取遣は当正月朔日ヨ相始メ御儀ニ御座候、尤商高は前年之分を年送り用ひ候積りニ仕、去寅年は増歩取遣無之内之儀故、壹万五千兩之半高七千五百兩を寅年惣商高百八拾貳万九千貳百拾七兩ニ而割、拾兩ニ付役銀貳匁四分六厘五毛宛、一ヶ年役銀高七千五百拾五兩銀壹匁九分九厘余、是を十二ヶ月ニ割、一ヶ月之役銀高六百貳拾六兩壹分銀壹分六厘五毛余ニ罷成候

但右は金壹兩ニ付役銀二分四厘六毛五糸ニ相当り申候、増歩ハ壹兩ニ付壹分ニ御座候間、差引一分四厘六毛五糸も多候得共、右端銀を相除候而ハ七千五百兩之高相減候ニ付、右端銀結込候故、本文之高ニ罷成候

勿論当年中之商高、来正月相揃候ニ付、来年相渡候壹万五千兩を商売高ニ割合、月々相渡候積御座候、左候得は商高虚実之儀も相分可申儀と奉存候、今年は右之割合を以取立可被仰付ハ哉、御内々奉伺候、以上

卯三月

牧野 大隅守

この内伺書には記録に誤写があつて文意を得難い部分もあるが、要するに役銀一万五千兩を前年度商高に割付けるという単純な方式に変更することの許可を仰いだものである。それは幕府がこれまで固執してきた一兩につき銀一分の増歩を兩替屋に取得させ、それを役銀として上納させるという原則を放棄したことを意味する。もつとも該伺書は原則の変更という表現をとらず、むしろ一分増歩との關係に拘泥して、数字を挙げて説明につとめてはいるが、去年の商高に割付ければ兩に四分九厘二毛に當つて、増歩の一分を遙かに超過することは明らかである（この計算に當つて商高を上中下に三区分して、その内訳と役銀高を記しているが、上中下区分の基準は不明であり、数字に誤写があるため意味を読みとることができない。ただ初年度の今年は増歩の行なわれなかつた去年の商高に割掛ける關係上、特別に役銀額の半減を認めることによって増歩超過分も半減しておきたいと言っているのである。しかしこれらの数字は、増歩と役銀の關係が存続していることを装うための虚飾に過ぎなかつたと云えよう。

この町奉行提案が正式の承認を得たのは一ヵ月余を過ぎた五月十日で、この趣旨に副つた市中兩替屋への申渡しは五月十四日と五月二十五日・二十六日の三回に分けて行なわれた。すなわち、五月十四日は山役金高七千五百兩を月割上納のこと、②月々商高は毎月書出すべきこと、③当月正月納入分は返却のこと、④休業中の者も天秤所持の上は役銀を納むべきことの四点、五月二十五日は役金割合は寅年兩替商高に應ずべきことを申渡し、翌二十六日請印に出頭した惣兩替屋に対し、銘々の一ヵ年分の割付高を交付の上、当月より四月迄の四ヵ月分の役金高を明後二十八日に納入、五月分は六月十日上納を申渡した。なお休天秤の者の役金高は一人前一二兩一四匁九分四厘六毛宛としている。

この割付によつて本兩替仲間の一ヵ年役金高は六軒合計七一四兩二步八匁七分四厘、月額五九兩二步余で、返却された正月役金高二八兩三步余の倍額以上となり、本兩替仲間行事は「右今日被仰下候御役銀凡壹兩ニ付貳分三厘貳毛程ニ相當り、中々壹分之増歩ニ不相當ニ乍恐迷惑仕候義ニ御座候」との不満を記している。当時の惣兩替屋の構成は

第6表 天明3年5月
現在江戸兩替
商の構成

本 三 番 上	兩 替 組 組 松寺領 野領	6人 55 533 4 15
計		613

「御役銀一件諸事扣」
より

第6表とされており、休天秤を含むものと思われるが、役金の割付のあった翌二
十七日には、三組・番組のうち、高額割付に難渋を申立てて、三百人計りが一紙
に日延願書を提出、本兩替仲間も同調して日延願を出したが却下され、納入期日
の二十八日に四ヶ月分の役金納入を済ませ、ついで翌月の六月七日町奉行所で直
し小判無料実施の申渡しが行なわれた。

このようにして強制実施された兩替役銀に対する錢兩替屋の反撥は依然として続き、天秤の返上が相つぎ、その都
度割増分の追徴が行なわれた。このような状況の中で、八月二十九日に兩替屋一同は物価騰貴・世上不況の折から、
天秤返上分の役銀追徴の免除願を提出したが、「外々納方ニ差障ニも罷成候間、難取上願⁽³⁰⁾」として、同年十月の再願
と共に却下した。

五

ところが、兩替役銀問題は翌天明四年の春から、またまた再燃した。それはさきの申渡しによつて兩替商から申告
させた昨年一年分の兩替商高の総額が、一昨年の約半額の九七兩余に過ぎなかったためである（第7表）。仮りに
この商高へ昨年同様規定額の半額七千五百兩を割付けるとしても、一兩当りの役銀は実に九分に当り、また一分増歩
で計算すれば役金高は僅か一六二七兩余にしかないという大きな誤算を生じたのであった。

急遽対策に着手した町奉行が同二月二十日付で側用人水野出羽守に提出し、勘定奉行松本伊豆守の供覧にも付され
た内申書によつて、この間の事情を窺つてみよう。その一節に次のような記述がある。

「月々書出候兩替高実情之儀ニ有之候哉、又は差略仕書出候哉、虚実之儀難計候間、内々風聞をも為承候処、兎角

実意難相知御座候、然処兩替屋六百三十拾壹人之内追々商売
 相止候もの共百二人、新規ニ加入仕候もの拾三人有之、差
 引減候方多罷成候

恐らく隠密同心の調査によると思われるが、商高減少の一因
 が廃業者（錢兩替）の増加、すなわち廃業一〇二人、新規加入
 一三人、差引八九人の減少にあることが第一に指摘されてい
 る。さきに触れた零細業者廃業の傾向は一層進行しつつしてい
 たことが知られる。

また奉行所が兩替商を召出して「寅年ノ商高格別減申候、如何之儀ニ候哉、御繁榮之御当地之事故、中々以書出候
 兩替高ニ而は有之間敷、畢竟役銀差出間敷為メ内端ニ書出候莫と相聞候」と追究したのに対する弁明が次のように書
 かれている。

御当地之儀は重ニ金通用ニ御座候得は銀子兩替取遣之儀、甚無數方ニ御座候、其上近年は上方ノ江戸表銀高直ニ
 御座候、尤上方諸代呂物代銀仕入ニ有之候故、右申上候通り御当地ノ上方銀下直ニ付諸代呂物代金子ニ而為指
 登、上方ニ而銀子相調候方勝手宜ニ付、重ニ金子ニ而為差登候故哉、去年中は兩替高相減申候、尤此末相庭之高
 下ニ寄、私共商高も増減可有御座と奉存候

この弁明は、既述の通り本兩替屋のかねてからの言分で、江戸の銀相場下落が上方商人に対する仕入商品代金の現
 金通送を増加させて、江戸における金銀兩替を減少させているのであり、兩替取引額の増減は銀相場の動向に依存す
 るという主張である。そしてこれとは別に商高減少の原因を次のように述べたことが記されている。

天明期江戸兩替屋役金一件（鶴岡）

第7表 天明3年江戸兩替商高書上

	金	兩歩	銀
正月	129,557-1		4.405
2月	86,082-2		3.650
3月	92,768-3		7.200
4月	95,189-0		12.730
5月	74,931-2		9.500
6月	63,593-0		10.010
7月	80,956-1		3.002
8月	61,109-2		4.303
9月	62,979-2		7.030
10月	64,718-3		12.010
11月	59,578-1		0.400
12月	104,880-0		11.530
計	976,345-2		10.770

「安永撰要類集」天明4年2月20日
 牧野大隅守内々申上候書付より

右寅年書出候商高が卯年商高相減候訳は、外商売重モニ仕、兩替方之儀は附商ニ致候もの有之候、然ル処去卯年夏中が諸色高直ニ相成、世上困窮も相障候哉、寅年商高が余程減少致候旨申立、且去年四月中諸商人共方ニ而釣錢遣候儀ハ格別兩替不相成旨相触置候ニ付、諸商人方ニ而釣錢と申立、聊之品相調候もの江も式朱判請取釣錢差出候様相成、場末杯は兩替屋間遠ニ有之候故、別而商人共方ニ而商人共方ニ而釣錢請取候儀と相聞、最寄之兩替屋方ニ而一ヶ年ニ金壹分之錢売遣し不申ものも有之、場末之儀は右駄之儀相障、商高減少致候儀ニ御座候

この部分は錢兩替の言分で、商高の減少は一般不況による主業の売上額の減少が副業として兩替額に反映したものだと言明した上で、錢屋が金貨を錢に兩替すれば、一分増となった歩銀を引かれるので、最近通用量の増した二朱判で小額の買物をし、釣錢を受取る形で兩替に代える者が増えた。このために小売商も売上錢を錢屋で兩替することを止めて手許におき、釣錢の支払に備えるようになっていた。これが錢兩替の商高減少をなしていると述べ、この現象は特に場末界限に顯著だと指摘しているのである。このような事情や兩替屋の弁明に対して

何程輕ものニ而も壹ヶ年ニ壹人壹兩程之兩替ハ是非可有之、江戸中武家寺院社家町家且旅人共凡之積り壹ヶ年三千万兩程は兩替可有之候、此三千万兩を以千兩ニ付壹兩宛役銀差出候積りニ而三萬兩程は可有之という極めて杜撰な推測の上に立つに過ぎなかつた町奉行所は、業者の身勝手な申告と怒りながらも、⁽³¹⁾具体的な対策をうち出す能力に全く欠けていた。そこで、番組兩替が発案し、本兩替・三組兩替も同調して提出された釣錢禁止令を条件とする役金一万五千兩上納引請の提案を受け容れ、実施することの許可を伺い出るに至つたのである。

但し、同じ市中釣錢の禁止を申請していながら、錢兩替と金銀兩替との間に、その目的の違いがあつた点を見逃すことができない。まず錢兩替の申請をみると

此上諸商人共方ニ而売溜錢不殘兩替屋共方ニ相払、釣錢入用之節は兩替屋共方が買取候様相成候得は、諸商人共

方ニ而取捌候錢江も増歩相掛候間、此上商高相増申候、依之御免被下置候増歩を以、以後役銀相納申候間、何卒諸商人釣銭停止ニ申付候ハ、役銀壹万五千兩上納可仕

と目算している。これは諸商人（商売が錢で行われる市中小売商）の売溜錢をすべて一旦兩替屋で金貨に兩替させ、必要な釣銭用に再度兩替させて、その都度増歩を加えた歩銀を出させることによって、一万五千兩の役金上納が可能になるという主旨で、商高を基準とする役銀割付の実施が目指されているのである。

これに対して、金銀兩替側の主旨は

尤諸商人売買之節、釣銭兩替屋が買取候様ニ相成候而は差支も可有之哉、此儀勘弁仕候処、商手広ニ仕候もの共は天秤耆挺ツ、願請所持致候得は、則兩替屋仲ヶ間加入之もの共天秤耆挺ニ付一統之役銀割掛可致上納（中略）右之通平均致候上ハ商高之多少無構、耆万五千兩を以、当時兩替屋五百四拾貳人平均ニ割、耆人耆ヶ年貳拾七兩貳分銀拾匁五分耆厘六毛ニ罷成候

とある通り、釣銭の禁止が実施されれば、大手の商人は歩銀負担を避けるために、自ら兩替商の兼業を始めるであろうから、同業者の数が増加するに相違ない。そしてその業者数の増加によって役銀の人別割が可能になるという目算に立っている。本兩替はこの申請の中で、切金・輕目金の直し手数料として一率一兩に銀三分を取得することの認可を抜きなく挿入している。明らかに利益の増加を計りつつ、役銀の商高による割付を回避することを目論んでいたのである。

町奉行所は安易に兩替商の提案を採用し、特に本兩替の申請を容れた役銀の人別割、直し金三分手数料の認可を、天明四年二月上旬に上伺した。しかもこの伺書の末尾には

右之通割付候時は場末坏ニ而渡世薄兩替屋之儀は天秤差上商売相止候も可有之候得共、耆人前之役銀員数相極候

上は、此上新規ニ加入致候ものも有之、差支之儀も無之、役銀銘々無滞差出候儀ニ御座候と、場末の零細業者切り捨てを表面に打ち出していたのである。

六

このようにして、天明四年二月に市中釣銭の禁止と増歩歩銀の励行による役金の人數割という新方式への変更かみえた局面は、担当の南町奉行牧野大隅守成賢が大目付に転任したのを機会に、大きな転換を迎えたのである。すなわち三月二十八日に担当を命じられた北町奉行曲淵甲斐守景漸は、即日銭屋世話行事に対して、過日の釣銭禁止の発令を条件とする役金上納請負の出願を却下する旨を伝え、本両替と協議して別案を以って出願することを命じた。続いて四月朔日には、格別の代案なしとの答申をもたらした本両替・銭屋に対して、掛り役人である隠密同心大芦喜惣右衛門を通して、一万五千兩の確保は側用人から北町奉行への敕命であるから、減額の訴えは一切罷成らず、追て呼出しあるまで差控えよとの申渡しが行なわれている。所轄の移動と共に、町奉行の対応は俄かに変化したのである。

その後、五月二十八日になって本両替仲間は役金一万五千兩上納の請書提出を命じられ、六月十日付で請書を提出したが、それに添えて、兼ねてからの主張である商高割付を止め、「天秤算加金」としての上納を出願し、大芦喜惣右衛門に対しては、別に長文を認めて、かつて南町奉行所に述べてきた主旨を詳述して理解を求めた。

町奉行所は、本両替と同時に銭両替仲間に対しても役銀上納請書の提出を命じたと思われ、しかも銭両替が請書の提出を拒否したと思われる節がある。⁽³²⁾これについての正確な記録を見出すことができないが、本両替屋三井の京都の本部へ宛てた報告の中に次の一節がある。⁽³³⁾

壹万五千兩御役銀上納之儀、銭両替屋よりは何分右之御高上納出来不仕候趣、此上御慈悲奉願上候と申訴訟六月廿

日ニ差上、天秤之儀差上可申とも差上申間敷とも不書上、只右之通御慈悲奉願上候旨申上候、壹万五千兩上納不相成候ハ、天秤取上ヶ可申と被仰渡候得ハ、速ニ不残差上候様ニ而罷出候趣ニ相聞申候

既に百人を超える廃業者を出して抵抗してきた錢兩替は、北町奉行所の新しい強行策に対して、惣廃業をも辞さずと言いつつ請書の提出を拒否したことが示されている。曲りなりにも、これまで協調につとめてきた本兩替と錢兩替は、こゝに至つて全く別個な対応をとるに及んだのである。

錢兩替の頑強な抵抗に直面した奉行所は、焦点を本兩替仲間に据え、七月朔日に本兩替屋六軒に対して、店主自身の出頭を命じ、町奉行直々ニ次のような内談に及んだ。

今日呼出候事密々相尋度事有之候ニ付呼出し候、先達而御役銀格別出情御請致し候段、手柄之事ニ候、右ニ付端々錢兩替屋とも互も申渡候所、殊之外難儀ニ思ひ、商売相仕舞天秤も上ヶ度趣相聞へ候、乍然壹万五千兩は相納不申候而は不相濟事、余り不便ニ思ひ候事故、御上ヶ被仰渡候事ニ而は無之候へとも、我等了簡ニ而申談候、六百三拾五挺之天秤六人之者ニ引請天秤株相立、右商売致度存候者ニは其方共存寄ニ而場所場末を見計、壹挺ニ付壹ヶ年五兩拾兩又は拾五兩宛位ニ而貸遣し、公儀ニは其方共壹万五千兩相納候様致間敷哉、左候時は其方共之永々株ニ相成、且月々商高書出し候事身上合相知候事故難儀ニ思ひ候ものも可有之、又御請申上候得は其方共規模ニも相成、町人なれと御上ニ而格段可被思召と思候事故、極密々ニ相尋候、乍然莫大之金高不承知ニも可有之哉、又は壹人ニ而引請度と申者も可有之哉(下略)³⁴

これは、現業錢兩替が総廃業した場合の措置に関する町奉行私案の提示である。現在の天秤数六三五と固定して兩替株とし、これを総べて本兩替の所有とし、希望者に貸付けて賃賃料を取得させることによつて役金一万五千兩の上納を本兩替仲間に請負わせるといふ計画である。その際の株賃料に土地柄による差等を付すれば、現業錢兩替の救済

にも資するであろうし、併せて本兩替屋が最も難色を示す商高の書上も免除されると説明したのである。これは錢屋総廃業の可能性という新事態を前にしているとはいえ、これまで重ねられてきた役銀割付法とは全く文脈を異にした発想である。

市中兩替屋の支配と役金請負という唐突な町奉行案の内示に困惑した本兩替仲間は、とり敢えず返答期日の同三日に、「惣天秤引請御役銀上納仕候儀は、此方手際にてハ中々以相勤兼可申、殊ニ多人数取_メリ無_レ覺束、乍恐御断申上_二と書面を以つて謝絶した上、役金高を年額八千兩とし、これを御定天秤六三五挺に割つた、一挺につき一二兩二歩余の一五挺分、一八八兩の上納を請_レ負う旨を付記して提出した。ところが、文中役金の減額に言及した廉で町奉行の激怒をうけ、不調法を詫びて答申の下げ戻しを願出ざるを得なかつた。町奉行と本兩替屋主人との内談は、このあと七月十六日に再び持たれており、その際の模様を本兩替屋行事は次のように記録している。

今日即答ニ聞度事有之ニ付自身手代とも不殘呼出し候、先達而自身手代共立得と為申聞、右答書差出候処、八千兩を割付拾五挺引請、六人之者共_レ壹ヶ年百八拾兩余差出度趣、ひらたく云バ御上を踏付ニ致候仕方、左ニは有之間敷なれと如何之訳ニ有之候哉、先右之趣答候様被仰付、厚キ御意ニすがり身分勝手而日申上候段奉恐入候段申上候処、被仰候ニハ尤先達而壹万五千兩御請致置候事ニ候得は、心得違ニ候ハ、心得違ニ可致遣、其節天秤引請候事相尋、断之返答書差出し、最早相尋候ニは不及事ニ候得とも、其方共六人は御府内ニ本兩替商売計いたし、殊ニ三井杯は御用も相勤居候事、外_レ天秤引請願人有之候時は、いづれも右之者之下ニ相立商売致候も不本意之事ニ思ひ候事故、再応呼出し相尋候、弥引請人有之、右之者下ニ相立候而も不苦候哉、存寄申上候様御被遊候ニ付、冥加至極難有奉存候、被為仰聞被下候通、下ニ相立候も歟ヶ數奉存候得とも、私共六人之儀本兩替町駿河町計住居仕、本兩替仕候儀故、錢兩替大人数之取_レり迎も手際ニ難參ニ付乍恐御断奉申上候、乍然錢兩替之

方ニ而重立手広ニ仕候もの共私共へ相加り候様被仰付、右之者共と得と熟談仕候ハ、相調候儀も可有御座哉、是以熟談之上ならてハ否難申上旨申上候所、御承知被遊被仰候は、錢屋共へ相尋候処、老軒ニ而天秤五挺八挺、尅挺拾五兩位之割ニ而引請度様子并尅分拾文之増歩相立テ書出し候、其方共差出候答書よりハ余程宜相見得候、乍然右之振合ニ而は上り天秤坏有之節割渡候得は難儀可致ニ付、本兩替・三組・番組之組々何百挺ツ、と相定渡し候方宜思ひ候、其方仲間ニ百挺ニ而も貳百挺ニ而も引請、天秤望候者有之候ハ、五兩拾兩又ハ拾五兩位ニも其方とも相對ニ而壳渡候而も宜候、又錢兩替ニ加り候方宜候ハ、夫ニも可致、返答致候様被仰付、得と勘弁仕御答書差上申度旨申上候処、又日延を願候哉、左候ハ、明日歟明後日迄ハ相待可遣旨被仰候ニ付、明後十九日ニ差上申度旨申上、引取申候

特定の個人に多数業者に対する独占支配権を与えて、業界の一元統制を計ることは、當時の幕府が屢々試みたところであるから、町奉行がそのような事態の可能性に言及したのは、必らずしも架空の談ではなかつたかも知れない。しかし少くともそれを実現する成案をもつていたとは思われない。ただ、兩度の密談を通して、錢屋の総廃業申立てをうけて町奉行が事後の再編成を真剣に検討している氣配を充分に察知し、仲間六人で九挺分の人数割を余分に引請ける形で、實質上前年度以下の負担で済まそうとした安易な対応では到底切り抜けられないことを本兩替屋は悟つたのである。錢兩替中の有力者にも参加を求めて再検討したいと申し出たのは、その為であつたと思われる。三井兩替店の京都本部宛の報告に「右之通錢兩替屋六百挺上ヶ候積心得罷有候事、御取上被遊候時は、江戸中大差支御座候付、捌方御吟味被成置候而御取上ヶ被遊候御工面之様ニも内噂いたし申候、暇と致候儀は相知不申候」と述べているのは、その辺の事情を示すものである。

一方、さきの七月三日付本兩替答申をみた時点から、町奉行所は有力錢屋——三組兩替の一部に少数の番組兩替を

含むか——とも談合を始めていたと察せられる。彼らとの協議を申出た本兩替に一応の諒解を示しながらも、本兩替・三組・番組の三仲間による分割支配案を、この席上で示しているからである。

因みに、このことを裏付ける史料として三組兩替の一人播新店の「五番日記」中に次のような答申書が見出される。

式度目 乍恐書付を以御窺奉申上候。

一兩替屋貳拾七人之者共奉申上候、当月十七日被召出被仰渡候ニは、御天秤六百三拾余挺、本兩替井三組番組と相訳り引請候哉、又は一鉢ニ御請可仕方可然哉御尋ニ付、乍恐奉申上候、本兩替屋義は是と格別相分り候者共ニ御座候、三組番組之儀は貳拾七人之内ニも相交有之候、此度御内密被仰渡候趣種々相談仕、御役金調達仕度勘弁候得共、前々奉申上候通り小人数ニ而御上納調達難仕、御天秤配分之儀も残り候兩替屋共疑心御座候而は迷惑仕候儀ニ御座候、依之貳拾七人之者共御天秤引請候高銘々相調候所、是以一同不仕、甲乙御座候て銘々御請高申上度候得共混雜仕候ニ付、惣高ニ而百〇挺御請申上、御役金上納可仕と奉存候、乍恐右之段御窺奉申上候

天明四年辰七月廿日 廿七人ニ而申上ル

これに即答を避けて二日後の七月十九日に出された本兩替仲間の返答書は次の通りである。

一本兩替屋六人之者共奉申上候、一昨十七日被召出、猶又密々被仰渡候趣奉畏、冥加至極難有仕合奉存候、御尋之趣得と勘弁仕候所、重立候錢屋之内、差加り候得は如何様ニも上納方可相納とは奉存候得共、多人数之儀申合等行届兼可申哉、左候得は彼是混雜仕可申哉、此所錢屋ともへ得と掛合不申候而は何れとも難申上当惑仕候、然ル上ハ私共計御定天秤之内御振り分ヶ被下置候ハ、私共仲間小人数之儀ニ御座候間、天秤百挺迄之儀ハ御預り申上、御役銀之儀ハ御割合次第上納可仕候

すなわち、町奉行の提案をうけて、六三五挺の中の一〇〇挺を引請け、その分の役金上納を請負うことを回答したのである。三井兩替店の京本店への報告に

此方仲間ニ引請之儀御尋被遊候所、御断申上候ニ付、又々百挺ニ而も式百挺ニ而も引請申間敷哉と再応御尋ニ御座候、あなたニ而も彼是を甚御心痛被遊候由御座候、錢屋方ニも身上宜敷もの式拾八人程ニ引請之儀御尋被遊、昨廿日錢屋御返答之積ニ御座候、彼是承合候得とも、此方仲間同様内密之事故、返答之様子相知不申候

とあつて、前引の錢屋有力者二七人の答申書提出の情報は掴み得たものの、本兩替仲間と三組・番組の錢屋間の連絡が断ち切れ、他仲間の動向を危惧している様子が窺われる。事実、どれだけの天秤数を引請けるべきかの判断は困難であつたと思われる。現に三井兩替店の報告に、本兩替仲間内部でも二百挺は軽いとする三谷と、五〇挺を限度とする三井との間に不一致があり、三井が百挺に妥協した経過が詳述されている。平素の業態から錢兩替との関係が比較的小さい三井には錢兩替に対する支配欲がなく、引請天秤の貸残りへの危惧が強かつたのである。

このような利害や思惑の違いは、本兩替のみならず、三組・番組仲間にも当然多くあつた筈である。それら各仲間内の異論の統一と仲間間の引請数の調整に、説得と恫喝を並用して進めた町奉行が、最終案として提示したものが八月二十三日付の次に掲げる「被仰渡」であつた。

先達而密々ニ而相尋候付、追々書出候趣見候處、切實無代後藤ニ而直させ候而も、即刻引替も不相成、日数廿日も相掛りい事故、右之内遊金ニ相成、元手ニ差支候付、素人ノ三分宛も取度趣、且沓分拾文之増歩之趣も、役銀商高ニ而相納候事故、年々商減少及候所、誠欺ヶ敷段、いづれも尤成事ニ候、依之此間より色々案し見候得とも、先達而も申渡候通、是非納候ハ而は不相濟事、ヶ様ニも致候ハ、難義ながらも宜可有之存候付此度改申渡候、本兩替六人之者ニ天秤株壹株を拾四五兩宛ニ而四拾株引請、右之内^(旗本寺)宿性寺領之者四人ニ四株相渡可遣、右四人之者へ此方相渡可遣、なれと、右四人之者とも八四人ニ而壹株も難引請者共、夫ニ而は端ニも相成候事故、右四拾株之内より四株相渡、壹株貳三兩位之相對ニ而渡し遣、其余は相對次第天秤請度ものへ渡し可遣、又其方共

仲間ニ而も商多少之者も有之候得は商多いたし候ものハ天秤五六株も引請候様ニ致、商無数者同様ニ耆株宛持候而は明キ天秤も多道利、又下地相納候高も有之間、得と相對可致事ニ候、尤公儀は拾四五兩ツ、之割ニ而六人之者共之内に代りく年行事ニ而も相定上納可致、且三組之もの四拾人ハ天秤株百四拾挺、右同様拾四五兩宛ニ而引請、右之内に上野領拾五人ハ右最性寺領同様ニ相心得渡可遣、乍然最性寺・上野領之者とも本兩替并三組に受候事をきらい、拾四五兩ニ而も公儀に請度由申候ハ、夫は此方右之内ニ而引拔相渡可遣候、且切金直し日間代素人三分宛取度事、三分位と書出候へとも、是は少々致相違無数様存候、日数廿日も相懸り月末ニ直ニ差出候得は、月越ニも相成候事故、耆四五分位も取候得は宜可有之、乍然伺之上ならてハ不相成事ニ候へとも、右程は取させ度存候得は、随分願相濟候様可致候、去年中取金直し高惣一駄ニ而六兩程も有之事ニ候得は、耆五分宛之割ニ而は凡千五百兩程も惣兩替方ハ入ニ相成、且沓分拾文之増歩も相付候得は、素人商ニ而ハ少々宛も徳用ニ相成、又役銀商高ニ不構故、世上手広ニ商高も前々之通賑敷可相成、扱又商高も不書出候得は銘々身上合も不相知候得は難儀なからも去年中相納候七千五百兩之割ハ勝手ニも可相成、皆々仕来候商売ニも不相離取統為致度、色々と案し出申渡候、いつも承知可致事ニ候、即答聞度候得とも、南役所ニ而三四年も懸り候事ニ候得は、即答ニも相成間敷、得と勘弁いたし、当月中ニ請致候様被仰渡候

右の「被仰渡」は、本兩替と三組兩替に對して町奉行から直接に行われたもので、その退席の後、番組兩替に對しては四七〇挺の割当てが申渡された。

この町奉行申渡は、さきの本兩替乃至それに三組兩替中の有力者若干名を加えたものに、既定の市中兩替株六三五株全株を所有させ、これを兩替業者に任意の金額で貸付けて貸株料を取得させることを条件として、一万五千兩の金座役金の上納を請負わせるという提案に比べると、大きな変更が加えられている。

第8表 天明4年8月22日組合別天秤株数割当
(第一次案)

本 三 番	替 組	人 6	株 40 (内済松寺領分 4)
	組	40	140 (内上野領分 15)
	組	469	470
計		515	650

すなわち、本兩替による市中兩替屋の一元支配を断念して、従来通り本兩替・三組・番組の三仲間の並立を認め、仲間ごとに持株数を割当てたのである(第8表)。一株の役金は一四、五兩とする。但し役金高だけの株貸料の納める能力のない特定の銭屋に対しては、本兩替・三組の持株内で特別の措置をとる。すなわち、済松寺領銭屋四人へ本兩替持分の四株を割当てるが、その貸料は一株二、三兩とし、上野領銭屋一五人の一五株は三組兩替持分の中から割当て、その貸料は済松寺領銭屋同様とする(もつとも済松寺領・上野領銭屋のうち一四、五兩を納めて直接の持株を望む者は希望に委ねる)という配慮を加えている。

また本兩替は一人平均六株、三組兩替は平均三株の割当をうけて、その分の役金を請負う代償として、かねてから申請しつづけてきた瑕金直し(金座は無料直し)に、一兩につき銀一匁四、五分程度の手数料を依頼者から取得することを認めるという条件が新たに加

えられている。

このような内容の申渡しは、三井店が京都への報告で「前件之通ニ而相片付候得は、当仲ヶ間ニ而は昨年相納候七千五百兩の割よりは少々輕ク相成申候、仲ヶ間割合之所相談いたし、昨年之納方も有之候得は、其高を以割合候時は手前出方少々減し候道理ニ御座候、此儀は仲ヶ間ニ相談申積御座候」と述べているように、一旦は百挺の引請を覚悟した本兩替仲間にとっては不満のないものであった。

本兩替による一元組織から三仲間並立へ町奉行所が方針を変更した原因は、いうまでもなく番組兩替の抵抗であったが、この修正案に対しても強硬な抵抗を続けた。このため、本兩替・三組兩仲間が九月二日に予定通り請書の提出

を済ませたのちも、番組兩替への割当、従つてまた最終的な役銀高の決定を遷延せざるを得なかつた。三井店の得た情報によると「番組四百七拾人は多人数故相談一決不致（中略）、多人数之内有株（十四・五両）シツサ兩難相納もの貳百人余御座候由、残り之内ニは貳三株位引請候而も宜身上株之仁も御座候由、兎角多人数故相談決着不致候由御座候」とある。割当天秤数四七〇挺は、本兩替・三組のような割増分は見込まれず、現在人数と一致していたことが知られるが、その半数近くが、十四、五兩の役金の上納を困難とする者たちであつた。

請書の提出から一と月余を経た十月九日に、本兩替仲間は奉行所へ呼出され、改めて次のような申渡しをうける。³⁴

先達而天秤株割付引請被仰渡候所、番組之方ニ而難引請由申者余程有之、百挺余も上り天秤ニ相成候付、又々割増申渡為引請候へとも、其余之所有之ニ付三組之方ニ五挺割増申渡引請相濟候、其方仲間は錢商売は不致銀斗ニ而手狭ニ有之候得共、右之趣故此度割増三株申渡候、右ニ而都合四十三挺ニ相成候間、相談いたし直ニ請書差出候様、尤役銀は先達而拾四五兩と被仰出候得とも、此度拾四兩ニ相心得可申候、左候得は割増三株引請候而も拾五兩ニ引別致候得は、纔之違ニ有之間、何れも引請候様被仰付（傍点引用者）

本兩替仲間への三株割増と役金高が一株一四兩と決定したことが申渡され、かつ三組に五挺割増の納得を既に得ていたことが判る。本兩替と三組への割当増加は番組兩替分の一部を振り替えたもので、申渡の中で本兩替は「錢商売は不致、銀斗ニ而手狭」、すなわち錢兩替とは無関係という理由をわざわざ挙げた上で、僅か三挺の増加を説得したのはそのためである。振替え分のお大半を引受けさせられたのが金銀兩替を兼ねる三組兩替で、表面上は五株増となつているが、前回三組に含まれていた上野領門前分一五株が別建てに改められたから、実質二〇株の増加であつた。

肝心な番組の動勢を具体的に知り得る史料を見出せないのが残念であるが、この割替えの間に、番組のうち一二人

が手錠に科せられたことが三井店の報告にみえるほか、⁽³⁵⁾ 役金一件の最終決定を老中に上申した町奉行の伺書の一節に、次のように記されている。

番組兩替屋四百六拾九人之内百五拾壹人、場末ニ而兩替之方ハ何も附商売之もの共ニ而、兩替商至而無數、其上商売高ニ割合株式引請候儀故、割合対談相勦兼候間、商売相休申度旨申上候ニ付、再応割合相對之儀申聞候得共、差当割合対談出来不仕候間、無是非商売相休候段、右百五拾壹人之もの共申出

長期間に亘る町奉行所の強圧にも拘わらず、最終段階においても四六九人の錢兩替の三分の一に近い一五一人が反對の態度を変えず休業の挙に出たことが、これによつて知られる。一人一株でなくともよいという奉行所の妥協案にも応じなかつたのである。

このような経過を述べたあと、伺書は次の具体案を上申している。

一本兩替屋六人共

四拾三株

濟松寺領四人共

此四人之商高少分ニ而壹株分之役金ニも引合不申候間、本兩替屋ニ割渡候株数之内ニ而株式請取、相應之割合役金本兩替屋ニ差出候様申聞、双方早速得心仕候

一三組兩替屋四拾人共

百四拾五株

一番組兩替屋三百拾八人共

四百四拾株

一上野領兩替屋拾人共

拾五株

都合六百四拾三株

壹株ニ付壹ヶ年役金拾四兩ツ、之積

壹ヶ年役金高

天明期江戸兩替屋役金一件（鶴岡）

九千貳両

右之通兩替株組合限引請役金可差出旨納得仕候、書面之通株高申付相極候上ニ而は、内割対談ニも相務、前書相
 休候もの共も追々立戻且新規加入之もの出来可仕哉ニ奉存候、右組合ニ相渡候株割合之儀、人数ニ合候而も又ハ
 商高ニ割合候而も相当之割合巨細ニは割付相成兼候間、少々ツ、之過不足ハ御座候得共、凡之割合を以前書之通
 り吟味仕、何れも熟得仕候、此上兩替相始候もの出来仕、追々株貸附候得は、其節ハ過不足無之様可相成奉存
 候、書面之六百四拾三株ニ而役金九千貳両、先拾ヶ年之積差出候様可申付候哉、奉伺候、

要するに、江戸市中の兩替株を六四三株に定め、これを本兩替・三組・番組お
 よび上野領の四仲間割に割付け、一株につき年額一四兩、合計九千二兩の役金を向
 う十年間、その上納を請負せるといふのである。こゝに示されている仲間別の
 割当を、さきの案と比較すれば第9表の通りである。この表に関連して差当り二
 つの点を指摘することができよう。

第9表 仲間別割当天秤数

	天明 4. 8. 23 (一次案)		天明 4. 10. 29 決 定 案	
	人数	天秤数	人数	天秤数
本 兩 替 濟 松 領 三 寺 組 上 野 領 番 組	6	40	6	43
	4		4	
	40	140	40	145
	15		15	
計	470	470	318	440
計	535	650	383	643

まず有力業者である本兩替・三組兩替の負担である。確かに一次案に比して兩
 組の負担は増し、人数の上で一二%の兩組で二八・六%の株を割付けられている
 が、上述の通り増加は本兩替の予測の半数に満たないものであった。そのみで
 なく、本来商高によって割当てられる筈であった役金が一株一四兩という平等割
 になった上に、兩替歩銀の一分・十文増しのほか、金座の瑕金無料直しと対照的
 に一兩に一匁四、五分(申請の五倍)の引替手数料取得の権利をも与えられたの
 である。少数の有力業者に有利な措置が採られたことは明白な事実である。

これに対して、天明二年当時の五三三人から四年八月の四七〇人、同十月の三一八人へと天秤を返上して休廃業者者二一五人を出して抵抗をつづけた番組兩替の場合は、三一八人の現業者に四四〇株が割付けられている。この役金一件を通じて番組が常に意見の不一致を続けたことは、番組錢兩替の本業が多様であるだけに、規模も利害も一樣でなかったことを示すものと思われるが、右の町奉行が明記している通り、廃業を敢えてしたのは「場末の兩替」の者たちであった。その現実を認識しつつ、彼らを切捨てた上で、残った三一八人に四四〇株を割付け、「此上兩替相始候もの出来仕、追々株貸附候時は、其節ハ過不足無之様可相成」との見通しの上で、本兩替屋らと同額の一株一四兩の役金を課したのである。

なお、町奉行伺書は本文のあとに

本文伺之通被仰付候ハ、当二月迄は七千五百兩之割合ニ而役金差出、其後吟味中ハ先役金差出不申相滞罷在候処、右未納之分此節一度に相納候様申付候而は一同難渋仕候間、本文株数役金之儀相極、一同申渡候翌月々々ニ割合為相納候様可仕候、且此度商売相休候もの共ハ当年中ニ相納、違背仕間敷旨口書申付置候間、其趣ヲ以爲相納候様可仕候

と付記している。今年三月以降の未納分は旧方式によって遡及し、月割上納させる。なお廃業者に対しても未納分は年内に徴集を終えるというものである。

さて、以上の内容を盛った町奉行の伺書は、十月十五日に老中田沼主殿頭へ直接内覧に供され、その同意を得たが、その際、二月以後の不納分の年内全額納入を指示されたため、その実施法を追加して、十月二十九日に正式に上伺の手続がとられた。次の引用はこの間の経過の正式記録である。

天明四辰年十月十五日田沼主殿頭殿ニ御直上之、御内覧被下候様申上候処、同十六日御熟覧被成候処、随分宜候

旨被仰聞御返被成候、其節金座^ニ不納之分、当年中不殘請取度趣之旨被仰聞候間、勘弁仕可申上旨申上置、同十七日御直^ニ勘弁仕候處、兩替屋^ノ之納は何^ニも伺之通御居置、御貸附金之内仮^ニ取立取替、金座^ニ貸置、月々納候内^ニ而引落候積り仕候方可然旨申上候處、左候ハ、随分宜候旨被仰聞候^ニ付、其通相心得、外^ニ思召も無御座候ハ、直^ニ今日水野出羽守殿^ニ差上候段申上、出羽守殿^ニ御直上之、御貸附金取替之趣も申上置、酒井石見守殿^ニも御直^ニ上之、同廿八日大前孫兵衛を以御下ヶ、伺之通承付上候様被仰聞、同廿九日承付出羽守殿・石見守殿^ニ丸毛金次郎^ニ相頼、大前孫兵衛を以上ル、主殿頭殿^ニは御直上之、瑕輕目引替歩合請取候御触之儀相伺候候、御承知之旨出羽守殿^ニ申上候様被仰聞候

この記録は、事が事実上田沼の専權によつて決せられていた幕閣内の実情を示しており、未納分全額の年内金座への給付という田沼の指示に対しても、町奉行は即時に対応している。すなわち、御貸附金の一部を臨時回収して金座へ未納金全額を貸与え、兩替屋からの月々の役金上納分を以つてその返済に当てる方策を提案し、容認されているのである。この町奉行の一時的な便法として金座へ振り向けた御貸附金は、「浅草平右衛門町他八カ所買請地代金一万七千百兩余当分町方御貸附の内」⁽³⁶⁾とあつて、その内実は詳かでないが、何れにしても町奉行の権限内で動かすことのできる町方御貸附金を転用することによつて、田沼の意に測つたのである。

かくして裁可を得た町奉行は、即日兩替屋中に対して正式に申渡を行なうと同時に、役金の取扱いを町年寄樽屋与左衛門の管掌とすることを指示した。

このようにして、天明元年八月に当時の南町奉行牧野大隅守が老中の指令を受け、金座後藤への兩替役金を申渡し、それから三年四カ月を経た天明四年十一月に、漸く天秤役銀という冥加金名目で役金の徴集が開始されたのである。そして北町奉行曲淵甲斐守が同年十二月に提出した報告者によると、後藤庄三郎方へ渡した金高は七、五七八兩

で、その内訳は第10表に示す通りである。一万五千兩の半減分七千五百兩を月割にした旧方式の月額六二五兩から新制度の九千二兩の月額七五〇兩への、一二五兩の増徴が明示されているほか、廃業者分を含めた未納分の取立が励行されたこと、田沼の命に従って、御貸附金の中から四千兩の転用は瑕金・輕目金修補費の貸付という名目で支給されたことが判る。

このように迂余曲折の末、天明四年十一月から新たに本兩替六人に四三株、三組兩替四〇人に一四五株、番組兩替に四四〇株と割付けられた兩替株が、その後どのように貸付けられていったか、特に一件中の二年間に二五人という多数の廃業者を出した番組兩替のその後の動向については、残念ながら殆んど知り得ない。

僅かに本兩替仲間に関しては、濟松寺領分四株を除く三九株を仲間六人で商高に應じて割付け、自分株を除いて希望者に貸付けたことが判る(第11表)。天明四年十二月十六日の本町二丁目越後屋幸助を皮切りに、同七年四月初旬にかけて三〇株の貸付を行なっているが、貸株の役金は八兩とし、差額の六兩は未貸付分と共に本兩替屋が負担している。⁽³⁷⁾借株して錢兩替を始めた者の本業には質屋・酒屋・油屋が多く、⁽³⁸⁾これら本兩替仲間持ちの株を借りた錢屋は、本兩替付錢兩替屋という新しい組合をつくって官許を受け、本兩替仲間の下部組織として、本兩替からの通知に従って独自に錢相場の書上げを行なった。

天明期江戸兩替屋役金一件(鶴岡)

第10表 天明4年後藤庄三郎え相渡候金高内訳

兩 金 1,250	當正月・2月分牧野大隅守勤役中相渡
金 444 銀 13.5	當3月分10月迄兩替相止候もの并相始候もの分役金
金 750 銀 10.0	9,002兩の割合役金當11月分
金 1,138 銀 6.8	當3月分10月迄吟味中不納分役金7,500兩の割合にて2ヵ月分
金 4,000	右吟味中不納之分役金来已年迄追々納候=付瑕金輕目金為入用御貸付金内にて取替此節貸渡候分
金 7,582 銀 30.3	合 計

天明4年12月10日「兩替屋共役金後藤庄三郎え相渡候儀申上書付」
(安永撰要類集)より

第11表 本兩替仲間預り天秤貸渡の本兩替附錢兩替名前一覧

	加入年月日	天 秤 借 受 人 (商売)	本兩替預り天秤数
1	天明 4.12.16	本町2丁目代八店越後屋幸助	三 谷 三九郎 6挺
2	" 5. 2.16	神田横大工町清次郎店伊勢屋弥兵衛 同5.11.4 返戻	
2'	" 5.12.10	四谷伝馬町伊勢屋勘兵衛	
3	" 5. 2.27	本所林町5丁目惣十郎店伊勢屋利兵衛(酒・水油)	
4	" 5. 5.21	新吉原京町1丁目藤右=門店伊勢屋吉兵衛(質)	
5	" 6. 6.14	橋町3丁目平左=門店上島屋甚左=門(酒)	
6	" 6. 6.14	本所外手町清兵衛店上総屋喜八(酒)	三井次郎右=門 4挺
7	" 5. 7.10	浅草源空寺門前家主伊勢屋甚助(質)	
8	" 5. 7.22	四谷内藤宿六軒町家主鴻池平兵衛(酒)	
9	" 5. 7.晦	牛込御細工町家主橋屋長右=門(酒)	
10	" 6. 4.10	本石町4丁目市兵衛店小西増五郎(西宮住宅, 酒・質)	三 谷 勘四郎 4挺
11	" 5. 3.10	浅草田原町1丁目家主伊勢屋文右=門(質)	
12	" 5. 3.10	元兩國若松町家主孫兵衛店大黒屋源兵衛(酒)	
13	" 5. 3.15	牛込五軒町家持伊勢屋七兵衛(質)	
14	" 5. 4.15	下谷唯念寺門前家主伊勢屋多右=門(質)	三 谷 善次郎 3挺
15	" 5. 2.15	四谷伝馬町2丁目平次店山形屋又右=門(紙)	
16	" 5. 2.15	四谷塩町2丁目伝八店田中屋小兵衛 同6.5.27返戻(酒)	
16'	" 6. 6. 7	牛込天徳院門前山田屋喜兵衛(酒・質)	
17	" 5. 2.15	四谷塩町3丁目介七店伊勢屋伊兵衛(質)	三谷 庄左=門 2挺
18	" 5. 3. 5	本銀町1丁目藤右=門店伊勢屋権七(質)	
19	" 5. 3. 5	本所緑町1丁目家持丸屋九兵衛(蠟・贅付油)	三 谷 喜三郎 11挺
20	" 4.12.17	南伝馬町2丁目家主喜多住藤右=門(油・紙)	
21	" 5. 2.23	四谷坂町家主和泉屋伝右=門(質)	
22	" 5. 4. 3	鉄炮洲本湊町茂兵衛店伊勢屋喜七(丹波粉)	
23	" 5. 5. 2	本所立川通花町源六店和泉屋勘右=門(太物)	
24	" 5. 4. 9	南柄木町吉右=門店日野屋喜八(茶・紙)	
25	" 6. 4. 6	元数寄屋町2丁目家主大坂屋甚兵衛	
26	" 6. 6.18	本所三笠町1丁目家主相模屋又兵衛(酒)	
27	" 6. 6.20	樽紐町仁右=門店伊勢屋藤兵衛(米)	
28	" 7. 2. 7	四ッ谷伝馬町2丁目孫兵衛店万屋勘右=門(水油)	
29	" 7. 4. 3	鉄炮洲船松町2丁目利兵衛店八丈屋饒兵衛(八丈島)	
30	" 7. 4. 5	浅草新堀端坂本町八兵衛店伊勢屋七右衛門(質)	

三井文庫所蔵「天秤株御役銀一件」天明5年2月16日の条より

第12表 天明4年9月三組兩替仲間天秤役銀引請案

人 名	株 数	人 名	株 数
1 播磨屋 新右門	13	25 吉野屋 喜兵衛	1
2 升 屋 源四郎	12	26 伊勢屋 治兵衛	1
3 殿 村 左五平	12	27 同 清兵衛	1
4 竹原 文右衛門	8	28 同 吉兵衛	1
5 村田 七右衛門	7	29 同 五兵衛	1
6 小 川 清兵衛	7	30 江川屋六郎兵衛	
7 荒木 伊右衛門	7	31 小島や 伊兵衛	
8 升屋 源右衛門	7	32 伊勢屋 彦太郎	
9 万 屋 伊兵衛	5	33 和泉屋次郎兵衛	
10 伊勢屋 弥三郎	4	34 伊勢屋 孫 八	
11 近江屋 十兵衛	4	35 和泉や 権兵衛	
12 平野屋 平 八	4	36 神戸屋 治兵衛	
13 越前屋 源兵衛	3	37 竹 原 文 平	
14 升屋 喜右衛門	2	38 大塚屋甚右エ門	
15 伊勢屋吉左衛門	2	39 伊勢屋 新十郎	1
16 山崎屋 又兵衛	2	40 内 田 清 蔵	1
17 田端屋 源兵衛	2	天 秤 数	125株 (121)
18 内 田 小四郎	2		()内の数字は 筆者計算
19 伊勢屋 彦兵衛	2		
20 浅 野 又兵衛	2		
21 伊勢屋 長兵衛	2		
22 万 屋 長之助	2		
23 伊勢屋七右衛門	1.5		
24 伊勢屋藤右衛門	1.5		

天明期江戸兩替屋役金一件(鶴岡)

因みに、三組両替の内部における天秤株の配分については最終的な結果は知り得ないが、八月の第一次案が提示された直後に、上野領分一五挺を除いた一二五挺分の仲間内の割当の模様が、播新店の「五番日記」(天明四年九月二日の条)に記録されている(第12表)。播磨屋新右門の一三挺を最高とするが、株割当を欠く一一名も存在したことが知られる。

新制度の発足に当って、従来新規開業者から取立ててきた三百疋の冥加金を廃止したのは、借株による開業乃至復業の一助するためであつたかも知れないが、本両替のように役金の一部を負担して貸付けるような力を持ち得ない番組両替などの場合、加入冥加金の免除がどれ程の効果を持ち得たであろうか。少なくとも、四四〇の番組両替の株数が直ちに実際の業者の数を示すものでないことは疑いないところである。

因みに、両替屋に対する役金の賦課は江戸のみでなく、京・大阪においても行なわれた。本稿ではこれに關説する余裕がないが、両地とも両替商の一致した抵抗の前に、江戸に勝るとも劣らない難航を続け、役金高の決定をみたのは京都が天明七年三月、大坂は同年四月のことであつた。第13・14表にみられる通り、両地の役銀賦課の基準は大坂が商高、京都は江戸同様一挺一四兩の天秤役となつており、その決定の経過なり根拠は窺い知れないが、両地における役銀賦課の混迷ぶりを露呈しているようにも思われる。⁽⁴⁰⁾

そして、この天明七年六月十七日付で、江戸の両替商は一致して役金免除の願書を提出している。これは同月老中職に就任した松平定信の政權の成立に伴なつて、勘定吟味役上席奥御用兼帶の関東郡代伊奈忠尊から町名主中に対して「町々諸運上物之儀、何々之品運上有之哉、其品々名前株書いたし、支配限り早々書付可差出候、運上物ニ類し候難義之筋有之候ハ、是又同様聞置度旨」の沙汰があつたのに即時に対応したものである。

以書付御願申上候

此度伊奈半左衛門様於御役所被仰渡候趣奉承知、難有奉存候、町中諸運上之義は追々御免之義被為仰立可被下置

候ニ付、兼而諸運上之品々御聞被置度御趣意之旨被仰渡候ニ付、左ニ奉願上候、

一私共兩替商売之義、從古來金銀而取扱、錢は商売不仕候ニ付、是を本兩替屋と申相統仕來り、享保年中御町中并寺社門前地共錢屋とも六百軒相極り、組合相立商売仕候ニ付是は錢屋と申來候、然ル処、天明元丑年牧野大隅守様御勤役中、本兩替屋并錢屋共一駄ニ御役銀被仰付、從古來金壹兩ニ付銀貳分之徳分御座候所、右御役銀被仰付候ニ付銀は三分、錢は三拾文之徳分被仰付、天明三卯正月より同四辰年二月迄壹ヶ年ニ惣高金七千五百兩之積を以、商高ニ応シ月々牧野大隅守様御番所へ相納、其後大隅守様御転役被遊、曲渕甲斐守様御掛リニ相成、天明四辰年三月より十月迄は前書之割合を以、樽屋御役所并相納申候、然ル処同十一月本兩替屋并錢屋共ニ天秤一挺ニ付金拾四兩宛之積を以、十ヶ年之間ニ年々役銀被仰付、尤右天秤都合六百四拾三挺、本兩替屋并錢屋共五組々御割渡シ被仰付、役金年々九千貳兩宛當未五月分迄上納仕候義ニ御座候、私共

天明期江戸兩替屋役金一件（鶴岡）

第13表 大坂兩替屋役金割付高 天明7年4月

	天明1・2年惣商高平均	1カ年役金高	右4年分総額
本兩替仲間	3,616,484 ^{兩歩}	17,433-2 ^{兩歩}	69,734 ^兩
錢屋兩組	532,406-2	2,566-2	10,266
計	4,148,890-2	20,000-0	80,000

〔後藤役銀一件〕より但金1兩ニ付永4文820566の割

第14表 京都兩替屋役金割付高 天明7年3月15日

	天秤数	1挺役金	1カ年役金高	4カ年分総額
本兩替仲間	40挺	14兩	560兩	2,240兩
錢屋仲間	80	(14兩)	1,120兩	4,480
計	120		1,680	6,720

〔後藤役銀一件〕より（但、当年中に納入の条件）

本兩替屋六人ハは天秤四拾三挺御渡被下置候ニ付、此役金カ々年ニ都合六百貳兩宛、樽屋御役所へ上納仕候、前書申上候通、兩替金カ兩ニ付貳分宛之徳分ニ御座候処、三分ニ被仰付候義は難有奉存候得共、私共ハ天秤数多奉請候ニ付御役銀多ク上納仕、金カ兩ニ付カ分之徳分ニハは上納ニ引合不申難儀至極仕候、別而兩替之儀は諸商売万物之相場ニ抱り候元商ハニ御座候得は、金カ兩ニ付カ分之余慶は輕キ義之様ニは御座候得共、積り候而ハ諸代呂物諸商人ハも抱り、御武家様方も同様ニ而世上一統難義仕候、畢竟役金と申候得共、年々運上ニ而御座候間、此上御慈悲を以天秤役金御免被為下置、前々之通ニ相成候様、御三ヶ所ハ被仰立被下度奉願候、錢屋兩替番組之義も組々行事共ハ御願可申上義と奉存候、右之趣何分御聞濟被下置候様奉願候、以上

天明七未年六月十七日

本兩替屋

駿河町家持

三谷 三九郎

本兩替町家持

三谷 勘四郎

駿河町家持

三井次郎右衛門

本革屋町太郎右衛門店

三谷 善次郎

駿河町久左衛門店

三谷 庄左衛門

同町同人店

三谷 喜三郎

山本 伝左衛門 殿

加藤 助右衛門 殿

大坪八郎右衛門 殿 (注、宛書三名は本兩替屋六人居町の町名主)

この本兩替仲間願書の文面は下書であつて、町名主から享保年中町中井寺社門前地兩替屋六百軒とあるのは誤りで、当時支配違いの寺社門前地は六百軒の外であつたこと等の指摘をうけて訂正の上提出したと行事記録に記されており、あわただしい出願であつたことが窺われる。

天秤役金を実現させた曲淵甲斐守は、この願書提出前の同月朔日西丸御留守居へ転じており、同年七月二十九日に後任の北町奉行石河土佐守正武から天秤役金の免除が惣兩替屋へ申渡された。

本兩替屋 井二

濟松寺領兩替屋

本兩替屋付錢兩替屋

三組兩替屋

番組兩替屋

上野領兩替屋

其方共兩替屋株之儀、四年己前辰年十月、六百四拾三株ニ相定、一株ニ付一ヶ年金拾四兩宛役金差出し候処、当月分迄は役金差出し、自八月は役金御免被成候

右ニ付其節相渡候焼印札井ニ当時組々浮天秤有之分、右兩様共不殘、懸樽屋与左衛門方へ可相納候、自今以後諸事辰年以前之通相心得商売可致候、尤切金輕目金通用之儀は安永七年五月御触之通相守可申候、且又金苞兩ニ付

銀毫分錢拾文之増分請取候様申付候所、向後右之増分相止、諸事通用手広前々之通兩替可致候、尤樽屋与左衛門方^レ申出、株帳ニ相付、前々之通心得違無之様商売可致事

役金の免除とともに、本兩替付錢兩替仲間は解散して各自居住最寄の番組へ編入され、江戸兩替商の組織は安永九年以前に復したのであつた。

また役金高の決定が遅れた京都・大坂両地では、割付申渡の際、過去四年分の上納を命ずると共に、その役銀が当年限りで停止される旨が触出されているが、実際にはどのように収束されたかは詳かでない。

要するに、御金改役後藤庄三郎と金座の救済のための「後藤役銀」と呼ばれた兩替屋からの役金徴集は、兩替業界の再編による一元統制への途を歩み出しながら、錢兩替、特に場末錢屋の強硬な抵抗によつて難航し、それを強行した時点で政權の崩壊が生じ、蛇尾の終局を見るに至つたのである。

本稿では、このような兩替役銀一件が、いわゆる田沼時代の政治・經濟の動き全体の中で占める意味よりも、事件の経過の裡から当時の江戸の兩替商の実態に関する諸事実を摘出するに止めた。

〈注〉

- (1) 三井高維校註「兩替年代記」原編、天明元年の条に「兩替天秤役銀一件」として、當時の本兩替仲間記録の抄録がある。なお近刊の三井銀行「三井兩替店」一八七一—一九〇頁、「大阪市史」第一、九四五—九四七頁参照。また古くは竹越与三郎「日本經濟史」5、第六章に該兩

- 替役金に関する叙述があるが、江戸の兩替役金の説明に大阪兩替商の史料を引用するなどの混乱がある。
- (2) 前掲「三井兩替店」。なお「兩替年代記」の頭註にも「兩替屋天秤株ニ付役銀上納ノ一件ハ田沼執政時代ノ財政經濟政策ノ一ニシテ、江戸ハ勿論大阪ノ兩替屋ニトリテモ商売浮沈ニ関スル重大事件ナリ」と記している。

- (3) 「兩替年代記」原編、三三八—三三九頁。
 - (4) 「徳川時代の金座」(『東京市史外篇5』) 一四一頁。
 - (5) 近世史料研究会「正宝事録」第二卷、「二七八〇」
 - (6) 「兩替年代記」三三〇頁。
 - (7) 「安永撰要類集」金銀錢兩替之部。
 - (8) 塚本豊次郎「増訂日本貨幣史」所収。
 - (9) 「徳川時代の金座」一四一頁。
 - (10) 日本銀行調査局「江戸期銭貨概要」
 - (11) 「明和撰要類集」十
 - (12) 「徳川時代の金座」一四〇頁。
 - (13) 金座後藤と田沼意次との係わりについては、「翁草」に「金座の儀、御由緒有之候得共、元來町人の儀に候へば、家柄而已にて、平生帶刀に不及候処、是又賄賂金を以、平生帶刀に相成候、加様の儀御家人總て信伏不致候事」(『日本隨筆大成』22、一二七頁)と記されている。
 - (14) 「三井兩替店」二八頁。
 - (15) 中井信彦「幕藩社会と商品流通」一七六—一七七頁。
 - (16) 江戸の本兩替仲間が勤めた公儀御用の内容は時代によつて異同があると思われるが、一般には、(一)諸御用金の包立、(二)上納金銀の鑑定、(三)金銀錢相場の書上、四改鋳時の新古金銀の引替、因御用金の預り等を主とすると考えられている(「兩替年代記關鍵」卷二考証篇八八頁)。
 - (17) 中井信彦前掲書、一九六頁。
 - (18) 田中康雄「寛政期における江戸兩替商の経営」(「三井天明期江戸兩替屋役金一件」(鶴岡)
-
- 文庫論叢」第二号)、国立史料館編「播磨屋中井家永代帳」(史料館叢書4)参照。
 - (19) 「兩替年代記」考証篇(一九頁)によると、享保九年二七組に編成された番組兩替のうち、壹番組は宝暦元年三谷善次郎一人となり、同人が本兩替に加入したため自然消滅となり、以後番組は壹番組を欠いたまゝ二六組となるとあり、三組兩替を以て壹番組に当てる説(「諸間屋再興調」の内、嘉永元年堀江町名主熊井理左衛門口上書)を否定している。
 - (20) 「兩替年代記」考証篇九—一九九頁。
 - (21) 国立史料館所蔵、播磨屋中井家文書「三番日記」
 - (22) 「安永撰要類集」(国立国会図書館所蔵、旧幕府引継書之内)。以下に引用する町奉行所の幕閣宛の伺・届書類は何れも同書に拠るため、一々の注記を省略する。
 - (23) 以下の叙述のうち、町奉行所書類の他は、三井文庫所蔵の本兩替仲間行事記録のうち「天明元丑年八月被仰之候御役銀一件諸事扣」(史料番号五五—)、「天明四年五月十日天秤株役銀一件」(同「一六九〇の一」)、「天明四辰年十一月以來天秤株御役銀一件」(同七〇七)に拠る。上記の三史料は一、二、三番と連続するもので、引用する史料は年次によつて区別できるので、注記を省略する。
 - (24) 「御役銀一件諸事扣」(一番)の天明元年八月廿九日の条に「同夜三勘店にて寄合仕、何れ書出し候積りニ相極

候処、三井も三庄方江御申有之候は、先達て太物商高之義書出候様被仰渡有之候所、其節亮高申上候義何分難渡ニ御座候趣、押而相願候得は御聞濟有之候由、此度両替高之義迎も同様之事ニ候へハ、此趣ヲ以後藤え不申出候積リニ尚又相談相催候事」とある。

- (25) 町奉行の再三の説得にも拘わらず、役銀の上納について江戸の両替商が納得せず、決着が永引いた模様を、天明四年八月十日付の田沼意次宛の町奉行の進言中に「品々勘弁仕候処、迎も金高一万兩は出来不仕候趣にて、其上公儀江相納候算加金之様ニは両替屋共存込不申、金座江差出候更ニ而已存罷在候ニ付別て氣請等も不耳」と述べている（「安永撰要類集」）

- (26) 「両替年代記」原篇三四三頁に、本両替仲間の個別の書上高が載せてある（後出第4表）。

- (27) 当時、江戸屈指の本店と目されていた三井の本両替仲間における商高の寡少性には多分に書上の際の作為が存した疑いが濃い。すなわち「後藤役銀一件」（三井文庫所蔵）中の天明三年五月廿七日付の京本店宛の報告によると、両替高の書上には、御為替組としての御用銀の両替高については役銀免除を願出た旨が記されており、その許認可の有無は知り得ないが、三井自身の判断で公用の書上げを除外していた可能性が含まれる。

- (28) 「御役銀一件諸事扣」の天明二年五月朔日の条に貼紙メモとして

「卯正月商内高書上増歩之分壹分宛之割合を以名主殿へ差出候積り六軒分左之通、

但売買合せ二ツニ割テ

両替高壹万七千貳百七拾八両貳分

壹百七百貳拾七匁八分五厘（下略）」

とある。

- (29) 前出第2表本両替人数のうち、文化五年の数字は彼等の加入によるもの。

- (30) 「安永撰要類集」金銀錢兩替之部、天明三年九月四日付側用人水野出羽守宛牧野大隅守申上書付

- (31) もともと釣銭禁止のことは本両替・三組の関知するところではなかったが、町奉行所より番組願出の趣旨に同調した願書の提出を強要され、諸問屋商人の反対を予測して実現不可能と察しながら提出したものである。

- (32) 錢兩替のうちの三組については、次のような願書を提出した事実が確かめられる。すなわち三組兩替の一員、播磨屋新右門店の「玉番日記」天明四年六月十九日の条に、

乍恐以書付御返答奉申上候

一両替屋三組四拾老人之者共奉申上候、先月廿八日行事共被召出、御役銀壹ヶ年二毫万五千兩上納可仕旨段々御利害被仰渡候趣、一同奉承知恐多奉存候間、私共組合之内右御役銀御割付上納奉畏候者も御座候処、外番

組錢兩替屋共御返答之趣承知仕候得は、過半売徳ニ引合兼商売相止申度段奉願度候上ハ、此上仲間之内人少仕候而ハ猶以右御役銀売徳引合不申、上納仕かたく御座候間、無是悲私共組合一同商売相止申度、乍恐此段奉願上候、以上

天明四辰年六月廿日

三組行吏

もつとも翌廿日の条には、同日右願書を北番所へ提出したところ、却下となつた旨が記されてあり、願書写の上欄に「此書付無用也」と注記があり、抹消の墨入れがしてある。

(33) 「後藤役銀一件」(三井文庫所蔵、別一三八五)。以下に引用する三井の京本店へ対する報告は同史料に拠る。

(34) 同右

(35) 播新店「五番日記」天明四年十月八日の条に、播磨屋新右門が御掛屋御用を勤める一橋家に対して提出した届書中に、当時番組に所屬し、播新と共に同家の御掛屋であつた土屋半兵衛の御咎勤慎中の事由を次のように報告している。

土屋半兵衛殿当月は御殿(一橋)月番ニ御座候所、此節御咎ニ而遠慮被致候ニ付、御用向手前ニ而相勤候、依之右之段御殿ニ相届候書付写

乍恐書付を以御届奉申上候

一私共兩替商売之義ニ付御役銀御上納仕候様、去々寅年就被仰付候、土屋半兵衛義同年商内方ニ御割付毫ヶ

天明期江戸兩替屋役金一件(鶴岡)

年四拾五兩毫分、銀拾貳匁毫分貳厘御割付通り去卯年差上ヶ御上納相済申候、然ル所又々当年曲淵甲斐守様於御番所、商内高ニ不拘天秤数を以御役銀御上納可仕旨、一統ニ被仰付候、土屋半兵衛儀持前天秤三挺ニ付右三挺之積ヲ以毫ヶ年金四拾五兩御役銀御上納可仕旨御請奉申上候所、寅年御上納高ハ金毫分拾貳匁分貳厘不足仕候段不調法之趣被仰渡、当九月晦日手錠被仰付候、依之御上納金高相増、五拾貳兩貳分御上納可仕旨御請奉申上候ニ付、早速相済御免可被仰付と奉存、其節右之段早速御届ケ不申上延引仕不調法至極恐入奉存候、且同商売之者共之内、右御銀も未決着不仕候ニ付一昨五日右半兵衛も御呼出ニ付御番所ニ罷出候所、御吟味中故手錠御免無御座候(下略)

とあつて、番組中にも可成りの身代のものが存在したことが窺われると共に、番組に対する町奉行の態度の厳しさが注目される。

(36) 「安永撰要類集」天明七年十月奈良屋市右衛門提出の「後藤庄三郎え御貸附金之儀申上候書付」による。

(37) 本兩替仲間六人の負担の実際を示すと、次頁上段表の通りである。

(38) 本兩替仲間からの貸天秤による新規開業者は、何れも「私共儀は何れも外商売有之候得共、差引難儀仕候故御天秤借請仕候」としている(「天秤株御役銀一件」)

(39) 「安永撰要類集」天明四年十一月十一日付樽屋与左衛

本兩替仲間天秤役金割合上納高内訳

	分担 株数	天秤三十九挺分		濟松寺領四挺分之 内三挺分助ケ役銀	
		1カ年役銀	1カ月分	1カ年分	1カ月分
駿河町 三谷 三九郎	7	兩 98	兩歩 8-0 10.00	兩歩 7-2 2.34	兩歩 0-2 7.70
" 三井治郎右ヱ門	5	70	5-3 5.00	5-1 8.10	0-1 11.93
本兩播町 三谷勘四郎	5	70	5-3 5.00	5-1 8.10	0-1 11.93
本革屋町 三谷善次郎	7	98	8-0 10.00	7-2 2.34	0-2 7.70
駿河町 三谷庄左ヱ門	3	42	3-2	3-0 13.86	0-1 1.16
駿河町 三谷 喜三郎	12	168	14.0	12-3 10.44	1-0 4.62
計	39	546兩		42兩	

「天秤株御役銀上納控」(三井文庫所蔵)より

門「兩替屋役金取立方并以來取斗方之儀ニ付奉伺候書付」の内に算加金免除のことを進言している。

(40) 前掲書「三井兩替店」には、大阪兩替商はこの割付に納得せず、役金上納は行なわなかったとされている(同書一八九頁)。なお京都の場合、「後藤役銀一件」によると、この他、御為替組その他の諸仲間諸会所所持之天秤にも一挺につき二兩宛を課している。

(41) 天明二年九月、呉服師後藤縫殿助に対する大坂堂島における米切手改兼帯の任命も、天明七年正月撤回されており、略同一の文脈で理解される。

